

飛 山

大分市大字東上野所在の横穴古墳群の調査

大分県文化財調査報告

第 28 輯

1973

大分県教育委員会

飛山

大分市大字東上野所在の横穴古墳群の調査

序 文

旧海部郡に属する坂ノ市から佐賀関にかけての海岸部一帯には、弥生時代から古墳時代にかけての数多くの遺跡が存在しており、また近くの丹生台地からは旧石器なども発見されているところから、このあたりは古くから文化が栄えたことが知られるのであります。

ところが、日本経済の発展にともない道路網の整備が緊急の課題となつてまいりました。大分、佐賀関を結ぶ一般国道 197 号線の改良工事もその一環として行なわれたわけであります。

第 1 号横穴古墳から第 4 号横穴古墳までの 4 基の横穴は工事の進行によって偶然に発見され、県教育委員会および大分市教育委員会によって緊急の発掘調査を行ないましたところ、これらはすべて現在まで荒されないままに残されたもので、しかも横穴古墳の構造および副葬品からみて学術的にも価値の高いものであることがわかりました。横穴古墳の性格上、工事予定地には数多くの横穴古墳が群集してあることが予想されるため、県教育委員会では即刻工事の中止を依頼し、関係各機関と横穴古墳の発見された部分の路線変更について慎重な接渉を重ねてまいりました。しかしながら道路工事はすでに横穴古墳のある丘陵の両端まで進められており、この段階での事業計画の変更は困難であるとの結論に達したわけであります。

このような経過を経て、できるだけ完全な記録保存を期して発掘調査を行ないましたところ、32 基の横穴古墳が発見されました。残念ながらこれらの横穴古墳は最終的には消滅してしまいましたが、この調査を通じて得られた資料のなかにはいくつかの新しい発見がなされ、この成果が今後の研究にいくらかないと貢献するものと確信する次第であります。

最後になりましたが、長期間の発掘調査に参加された調査員の方々、県道路課、東部道路整備事務所はじめ工事関係者、種々ご協力をいただいた大分市教育委員会はじめ地元公民館、住民の方々など関係各位に対し心から謝意を表します。

昭 和 48 年 3 月

大 分 県 教 育 委 員 会

教 育 長 山 本 峯 生

例　　言

- 1 本書は、国道197号線の改良工事にともない発見された、大分市大字東上野字百合野に所在する横穴古墳群の調査報告である。
- 2 発掘調査は昭和47年8月10日から10月16日にかけて行ない、第1号～第3号横穴については大分市教育委員会が調査主体者となり、第4号～第32号横穴については県教育委員会が主体者となった。調査費は大分県が負担した。
- 3 横穴番号は工事の進行にしたがって発見され、調査を実施した順序によるもので、本報告書でも混乱を避けるためにこれを踏襲した。
- 4 本書の執筆は、真野和夫、渋谷忠章があたり、真野が編集した。実測図の作成および製図担当者については挿図目次に記載したとおりである。
なお、実測図はできるだけ多くを載せることにつとめたが、時間その他の理由で割愛せざるを得なかつたものもあることを予めお断りしておく。

目 次

I 調査の経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 横穴群の調査	6
(1) 第 1 号 横穴	6
(2) 第 2 号 横穴	11
(3) 第 3 号 横穴	11
(4) 第 4 号 横穴	11
(5) 第 5 号 横穴	16
(6) 第 6 号 横穴	19
(7) 第 7 号 横穴	19
(8) 第 8 号 横穴	19
(9) 第 9 号 横穴	22
(10) 第 10 号 横穴	23
(11) 第 11 号 横穴	23
(12) 第 12 号 横穴	23
(13) 第 13 号 横穴	23
(14) 第 14 号 横穴	28
(15) 第 15 号 横穴	28
(16) 第 16 号 横穴	30
(17) 第 17 号 横穴	30
(18) 第 18 号 横穴	32
(19) 第 19 号 横穴	33
(20) 第 20 号 横穴	36
(21) 第 21 号 横穴	36
(22) 第 22 号 横穴	37
(23) 第 23 号 横穴	38
(24) 第 24 号 横穴	40
(25) 第 25 号 横穴	40

(26) 第 26 号 横 穴	42
(27) 第 27 号 横 穴	42
(28) 第 28 号 横 穴	42
(29) 第 29 号 横 穴	42
(30) 第 30 号 横 穴	44
(31) 第 31 号 横 穴	44
(32) 第 32 号 横 穴	45
IV. 総 括	46
構 造	46
遺 物	48
(1) 装 身 具	48
(2) 武 器	51
(3) 馬 具	55
(4) その他の鉄器	55
(5) 土 器	56
(6) その他の遺物	58
ま と め	59

図版目次

図版第一	横穴群遠景	(一)	
図版第二	第一号横穴	(一)	構造
図版第三	第一号横穴	(二)	構造および遺物の出土状態
図版第四	第一号横穴	(三)	構造
図版第五	第一号横穴	(四)	障壁の構造および土器出土状態
図版第六	第一号横穴	(五)	遺物の出土状態
図版第七	第一号横穴	(六)	障壁内遺物の出土状態
図版第八	第二号横穴	(一)	全景
図版第九	第二号横穴	(二)	遺物の出土状態
図版第一〇	第三号横穴	(一)	入口の閉塞状態および発掘前の内部の状態
図版一一	第三号横穴	(二)	遺物の出土状態
図版一二	第三号横穴	(三)	遺物の出土状態
図版一二三	第四号横穴	(一)	遺物の出土状態
図版一四	第四号横穴	(二)	遺物の出土状態
図版一五	第五号・第六号・第七号横穴遠景		
図版一六	第五号横穴		遺物の出土状態
図版一七	第七号横穴		二重の閉塞状態
図版一八	横穴群遠景	(二)	
図版一九	第八号横穴	(一)	全景
図版二〇	第八号横穴	(二)	遺物の出土状態
図版二一	第一三号横穴	(一)	全景
図版二二	第一三号横穴	(二)	板石敷の入口部および遺物の出土状態
図版二三	第一三号横穴	(三)	遺物の出土状態
図版二四	第一四号横穴		入口の閉塞状態および内部の石敷
図版二五	第一五号横穴		内部の構造および入口の状態
図版二六	第一七号横穴	(一)	遺物の出土状態
図版二七	第一七号横穴	(二)	遺物の出土状態
図版二八	第一九号横穴	(一)	入口の閉塞および須恵器の出土状態
図版二九	第一九号横穴	(二)	前庭部須恵器の出土状態
図版三〇	第一九号横穴	(三)	遺物の出土状態
図版三一	第二〇号横穴		遺物の出土状態
図版三二	第二一号横穴	(一)	内部および入口の状態
図版三三	第二一号横穴	(二)	遺物の出土状態
図版三四	第二二号横穴		全景および遺物の出土状態
図版三五	第二三号横穴	(一)	全景
図版三六	第二三号横穴	(二)	遺物の出土状態
図版三七	第二三号横穴	(三)	遺物の出土状態
図版三八	第二五号横穴		全景
図版三九	第二七号横穴・第三二号横穴		遺物の出土状態

図版第四〇	第三一号横穴	全景および遺物の出土状態
図版第四一	入口閉塞の状態	第一八号・第二九号・第三〇号横穴
図版第四二	横穴群遠景(三)	発掘終了後
図版第四三	第一号横穴出土遺物(一)	玉類・土製円板・帶金具・金銅製雲珠残欠
図版第四四	第一号横穴出土遺物(二)	鉄鎌・刀子・鉄斧・轡
図版四五	第一号横穴出土遺物(三)	土器
図版四六	第二号横穴出土遺物	環・ガラス玉・扁平石板・須恵器・鉄鎌
図版四七	第三号横穴出土遺物(一)	鉄鎌・鉄刀・轡
図版四八	第三号横穴出土遺物(二)	須恵器
図版四九	第三号横穴出土遺物(三)	須恵器
図版五〇	第四号横穴出土遺物(一)	玉類・鉄鎌・帶金具
図版五一	第四号横穴出土遺物(二)	鉄鉾・轡・馬具残欠
図版五二	第四号横穴出土遺物(三)	鏡板・杏葉
図版五三	第四号横穴出土遺物(四)	土器
図版五四	第五号横穴出土遺物(一)	玉類・環・刀子・鉄刀
図版五五	第五号横穴出土遺物(二)	鉄鎌・轡
図版五六	第六号横穴・第七号横穴・第八号横穴出土遺物	
図版五七	第八号横穴・第九号横穴・第一〇号横穴出土遺物	
図版五八	第一三号横穴出土遺物(一)	環・管玉・土製練玉・齒・刀子・鉄鎌
図版五九	第一三号横穴出土遺物(二)	鉄鎌・馬具残欠
図版六〇	第一三号横穴・第一一号横穴・第一六号横穴・第一八号横穴出土遺物	
図版六一	第一四号横穴出土遺物	刀子・須恵器
図版六二	第一七号横穴出土遺物(一)	金環・ガラス玉・土製練玉・刀子・鉄斧・鉄鉾・鉄鎌・ひる鎌・帶金具
図版六三	第一七号横穴出土遺物(二)	鉄鎌・轡・須恵器
図版六四	第一九号横穴出土遺物(一)	紡錘車・管玉・雲珠・辻金具・轡
図版六五	第一九号横穴出土遺物(二)	須恵器
図版六六	第一九号横穴出土遺物(三)	須恵器
図版六七	第二〇号横穴出土遺物(一)	鉄鎌・須恵器
図版六八	第二〇号横穴出土遺物(二)	鉄刀・刀子・鉄斧・轡
図版六九	第二一号横穴出土遺物	環・勾玉・ガラス玉・土製練玉・鉄鎌・刀子
図版七〇	第二二号横穴出土遺物	ガラス玉・土製練玉・鉄鎌・刀子・須恵器
図版七一	第二三号横穴出土遺物(一)	玉類・矢筒金具
図版七二	第二三号横穴出土遺物(二)	鉄鎌・刀子・須恵器
図版七三	第二三号横穴・第二四号横穴出土遺物	
図版七四	第二五号横穴出土遺物	環・ガラス玉・土製練玉・鉄鎌・刀子・鉄刀・雲珠・辻金具・須恵器
図版七五	第二七号横穴・第二八号横穴出土遺物	
図版七六	第二九号横穴・第三〇号横穴・第三一号横穴・第三二号横穴出土遺物	
図版七七	表採の須恵器	

挿 図 目 次

第1図	遺跡付近地形図および遺跡分布図	3
第2図	飛山横穴群地形図	5
第3図	第1号横穴実測図	7
第4図	第1号横穴出土遺物実測図	9
第5図	第1号横穴出土馬具実測図	10
第6図	第1号横穴出土土器実測図	10~11
第7図	第3号横穴実測図	12
第8図	第3号横穴出土須恵器実測図	12~13
第9図	第4号横穴実測図	13
第10図	第4号横穴出土鉄器実測図	14
第11図	第4号横穴出土馬具実測図	15
第12図	第4号横穴出土土器実測図	17
第13図	第5号横穴実測図	18
第14図	第7号横穴実測図	20
第15図	第8号横穴実測図	21
第16図	第8号横穴出土遺物実測図	22
第17図	第13号横穴実測図	24
第18図	第13号横穴出土鉄器実測図	25
第19図	第13号横穴出土馬具実測図	26
第20図	第13号横穴出土土器実測図	27
第21図	第14号横穴出土土器実測図	28
第22図	第15号横穴実測図	29
第23図	第17号横穴実測図	30
第24図	第17号横穴出土遺物実測図	31
第25図	第17号横穴出土須恵器実測図	32
第26図	第19号横穴実測図	33
第27図	第19号横穴前庭部須恵器出土状態実測図	34

第28図 第19号横穴出土須恵器実測図 (一)	(真野実測・製図)34~35
第29図 第19号横穴出土須恵器実測図 (二)	(真野実測・製図)35
第30図 第19号横穴出土雲珠・辻金具・鍔実測図	(真野実測・渋谷製図)36
第31図 第22号横穴出土鉄器実測図	(真野実測・渋谷製図)37
第32図 第23号横穴実測図	(真野・上村実測・渋谷製図)38
第33図 第23号横穴出土矢筒金具実測図	(真野実測・製図)39
第34図 第25号横穴実測図	(後藤・清水・渋谷・網田克美実測・渋谷製図)41
第35図 第30号横穴実測図	(後藤・渋谷・上村実測・渋谷製図)43
第36図 第32号横穴出土土器実測図	(渋谷・真野実測・渋谷製図)44
第37図 飛山横穴群出土装身具実測図	(渋谷実測・製図)49
第38図 飛山横穴群出土鉄鏃集成図	(真野実測・製図)52
第39図 大分市滝尾「滝尾百穴」60

別付図 飛山横穴群構造一覧

(真野作成・製図)

I 調査の経過

坂ノ市地区では、新産都をめざす第2期工事の発足に先駆けて、人家に挟まれ狭小となつた国道197号線の改良工事が行なわれていた。新道は大在～細間において国鉄日豊本線の南側を走るものであった。飛山横穴群の発見に先だって、県教育委員会では、路線の開通によって破壊される恐れのある周知遺跡について現地調査を行なつてゐた。⁽¹⁾

一方、路線工事が東側に進むにつれて、採土を兼ねて路線をさえぎる丘陵突端の削除作業が行なわれた。場所は日豊本線が坂ノ市～幸崎間で国道と交叉する地点に近接している。

ところが、丘陵の東端から始められた削除作業が上から約10ほど進んだ際に、天井部が陥没して横穴が発見され内部から完形の須恵器数点が持出されたとの通報があつた。昭和47年8月10日のことである。現場では陥没部を通ることができないブルドーザーが立往生して、折から雨模様の天気に工事関係者の気持をいら立たせていた。したがつて、まず遺存する天井部および入口の閉塞状態を調査したのち、一端横穴を埋めてブルドーザーを移動させる作業を行なつた。この段階で、天井部の陥没した横穴の西側にさらに2基が発見されたので、1号～3号横穴としてひき続き発掘調査を実施し、8月19日に終了した。この3基の横穴の調査は大分市教育委員会が主体者となつて行なつたものである。その後工事が再開され4号横穴が発見されて応急の発掘調査をしたが、調査に並行して進められていた工事によってさらに広い範囲にわたつて11基が発見されるによんで、ついに工事の中止を要請するにいたつた。このまま工事が進めば横穴群の全貌は明らかとなるが遺構は消滅する結果となる。この段階で、横穴保存の声が各方面に高まり、関係者の間では路線の変更についても検討が行なわれた。しかし、すでに工事が横穴のある位置の両側まで進行していること、国道と現場に挟まれた土地にはボーリング場の建設が進められていて丘陵をけずらずに北側への迂回が困難であるなどの理由で話し合いは難航し、結局路線変更は実現せず緊急調査を行なうこととなつた。

調査は9月8日に再開されて4号横穴の補足調査を行ない、10月12日に32号横穴が終了しその後の削土工事が一応完了するまでを含め、10月15日まで実施された。

調査員の構成は次のようである。

小田 富士雄 (別府大学助教授・県文化財専門委員)
黒野 肇 (北九州市文化財専門委員)
轟 次雄 (洞南郷土史研究会会員)
上村 佳典 (別府大学研究生)
宮崎 正文 (別府大学学生)
山手 誠治 (同)
網田 克美 (同)
後藤 宗俊 (大分県教育庁文化課)
清水 宗昭 (同)

真野和夫 (大分県教育庁文化課)
渋谷忠章 (同)
安部幸人 (大分市教育委員会社会教育課)

調査が非常に長期にわたり、また急であったため調査員の確保について、別府大学教授賀川光夫氏、同助教授小田富士雄氏にはとくにご配慮をいただいた。また県道路課、東部道路整備事務所をはじめ工事関係者、地元大分市の教育委員会、坂ノ市公民館、地元の方々にもひとかたならぬご協力を賜った。なお現地の地質については、県立大分女子高校教諭・県専門委員の臼杵卓三氏のお世話になった。記して感謝申し上げる次第である。

註 (1) 城ノ原横穴群・王ノ瀬石棺

Ⅱ 遺跡の位置と環境

飛山横穴群は、大分市大字東上野字百合野に所在する。現場は、国鉄日豊本線が坂ノ市～幸崎間ににおいて一般国道197号線と交叉する地点に近い。

大分市東部から佐賀関にかけての半島状の突出部には、中央を佐賀関山塊（樅ノ山山地）とよばれる400m～500mの山塊が連なってそのまま海に迫り、平野の少い地形をなしている。坂ノ市地区はその基部にあたり海岸低砂丘との間に狭長な平野が開けている。横穴群の発見された丘陵は中央部の山塊から離れて海岸部へのびた標高20m前後の低丘陵で、横穴はその東北端に位置している。付近は通称「飛山」と呼ばれ、すぐ上には社がまつてある。

この付近の丘陵地は、更新世期の鶴崎層、大在層と称される地質系統に属する段丘堆積層から成っている。⁽¹⁾ 現地の切通しにおける観察では、小礫・砂・シルトの互層が主体となって、地表に近い部分を薄く褐色ロームが覆っている状態がみとめられた。したがって、硬い砂層あるいはシルト層に掘り込まれた横穴は遺存状態が良好であったが、小礫を主体とした層に掘り込まれたものには崩れ易いものがあった。

次に、入口の閉塞や内部の敷石に使用された栗石および板石などの石材について若干ふれねばならない。栗石は暗緑色ないし黄緑色を呈する蛇紋岩化した藍閃岩が大部分を占め、扁平な片岩系統の小礫を併用したものもある。板石材としては緑色片岩、黒色片岩が使用されている。これらの使用石材はいずれも佐賀関半島の各地に産するもので、入手は容易である。



1. 久原遺跡 4. 千人塚古墳 7. 猫塚古墳 10. 猪ノ谷古墳 13. 飛山横穴群
2. 木田名辺山遺跡 5. 馬場石棺 8. 中原古墳 11. 元金毘羅石棺
3. 細遺跡 6. 馬場古墳 9. 築山古墳 12. 坊主山古墳

× 弥生遺跡
● 円墳
■ 前方後円墳
○ 飛山横穴群

第1図 遺跡付近地形図および遺跡分布図

さて、飛山横穴群のある坂ノ市～神崎地区の歴史的環境はとくに弥生時代後期から古墳時代にかけて興味ある問題を含んでいる。⁽²⁾

まず第1に青銅利器の集中であって、佐賀関町幸ノ浦遺跡（中広銅矛1）、坂ノ市細遺跡（細形銅戈1）、同久原遺跡（狭鋒銅戈先）、同木田・名辺山遺跡（銅矛2・銅戈3）、同浜遺跡（平形銅劍4）などをあげることができる。

第2には著名な古墳が集中していることである。まず、鍬形石と漢式鏡の出土古墳として確認された⁽³⁾猫塚古墳がもっとも古式に位置づけられ、つづいて馬場古墳、築山古墳などの前方後円墳が築造されやや離れるが大野川右岸寄りには3基の前方後円墳をもち、その1つから碧玉製釧が発見された野間古墳群がある。また両地域の中間、字宝来には県下でも最大規模を誇る亀塚古墳が知られており、近くの王ノ瀬天満宮には整美なつくりの家形石棺がある。また、市尾には方格規矩鏡、玉類、環頭大刀、短剣22を出土した上ノ坊古墳がある。後期古墳では、中ノ原古墳が石室を有する古墳として知られているが、この時期になると主流は飛山におけるような横穴古墳に移っていたと考えられる。しかし、この付近での周知の横穴古墳はきわめて少く、城ノ原横穴群をあげうるにすぎない。

このように、弥生時代後期から古墳時代の中頃あたりまで隆盛をきわめた坂ノ市～佐賀関地区も、5世紀後半以後しだいに振わなくなり、大分地区にその中心を譲る。このことは、海部族の地として知られるこのあたり一帯が、瀬戸内海交通の要衝を占め大和勢力の九州侵透あるいは、朝鮮進出において重要な役割を果たしていたことを示している。そして、大和朝廷の対外的後退とともに海部族もその勢力を衰退させて行ったと考えられる。

註 (1) 宮久三千年 「大分県の地質」 大分県

(2) 賀川光夫・小田富士雄「中ノ原・馬場古墳緊急発掘調査」大分県文化財調査報告 第15輯 昭和43年

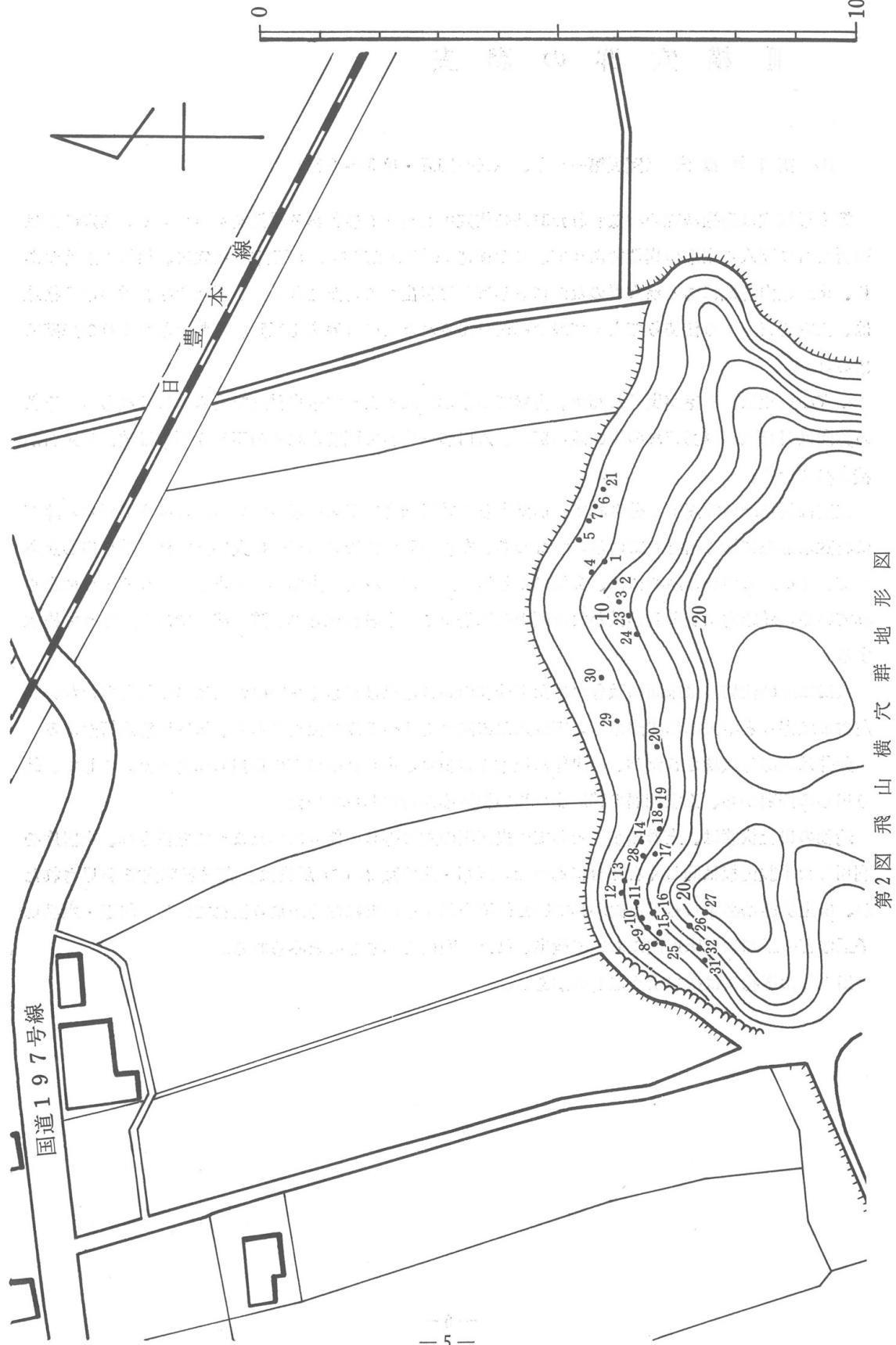
(3) 賀川光夫・小田富士雄「野間古墳群横尾貝塚小池原貝塚緊急発掘調査」

大分県文化財調査報告 第13輯 昭和41年

(4) 坂ノ市地区教育研究会郷土研究部編「坂ノ市を中心とした原始時代の文化」

昭和33年

100 m



第2図 横穴群地形図

III 横穴群の調査

(1) 第1号横穴 (図版第一~七、四三~四五・第3~6図)

第1号横穴は発掘調査の行なわれた31基の横穴中もっとも特色ある構造をもっている。横穴の形は鴨居をもつ妻入り家形の構造であつて、この構造は飛山横穴群では第15号横穴に、類似の形態があり、また県内各地にある横穴群のなかにもしばしば見出すことができる。1号横穴を特徴づける構造は、玄室を三分する仕切りでとくに最奥に造り出されたものは屍床を区画する整美なつくりの障壁である。

横穴の規模は、玄室が奥行2.85m、奥壁での巾が2.30mあって中央付近で高さは1.40mある。主軸の方向はN35°W。約0.7mの短い羨道部は、入口が一枚石で閉塞されその下部周囲には数個の栗石が積まれている。

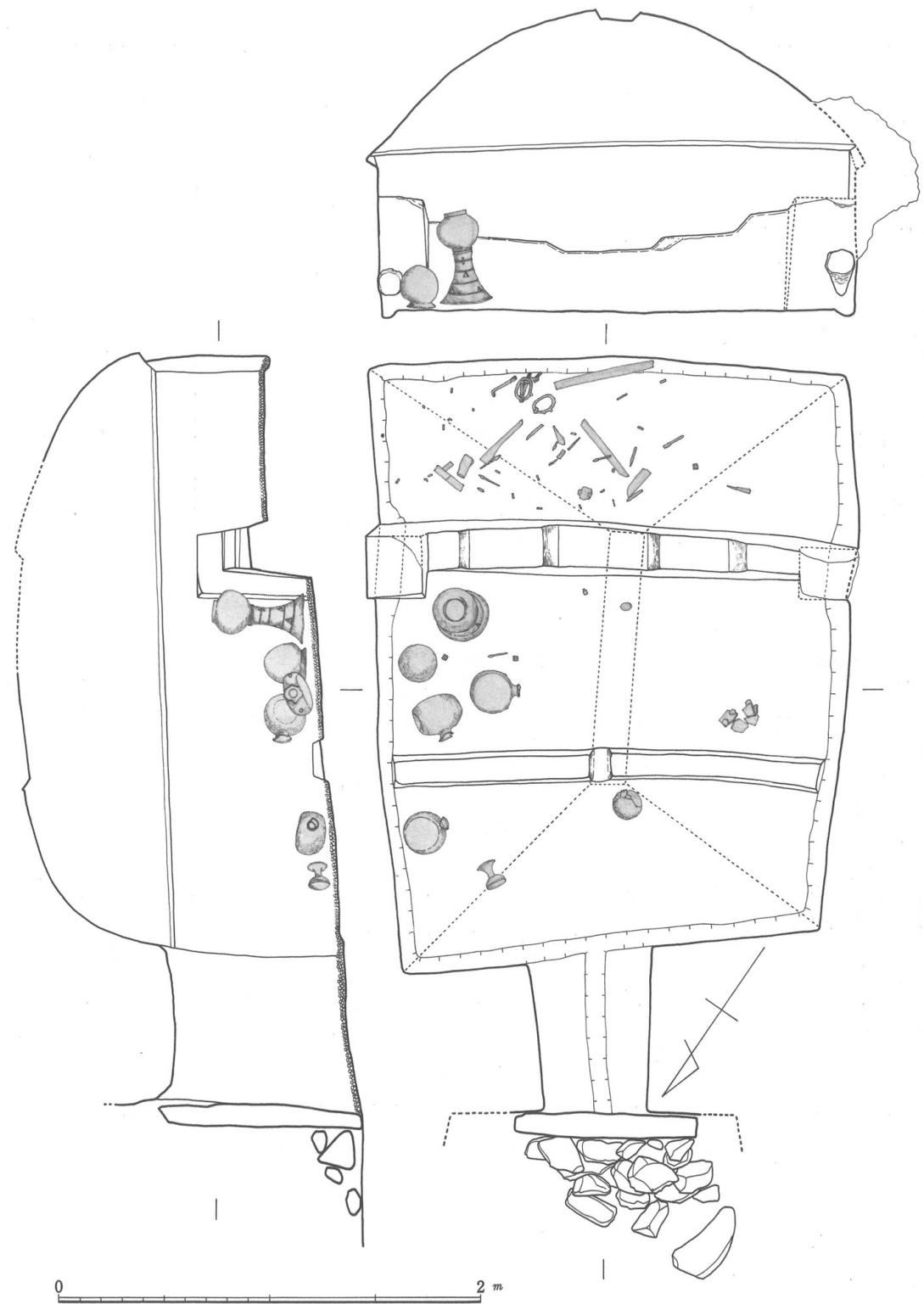
玄室は約75cmの間隔で三分されて、奥壁寄りに約20cm高い屍床を設けている。屍床を区画する障壁は特殊な形態に造り出されている。すなわち、左右の側壁に接する部分に太い門柱状の造り出しがあって、そこから伸びた障壁には、2段の割り込みが行なわれて中央部がもっとも低くなるように造られている。屍床内は玉砂利が敷かれ周囲の壁に沿って排水溝が切られ、障壁部分では孔を穿って排水する。

入口に近い仕切りは床面に敷きつめた玉砂利の高さとほぼ同じくらいのためにあまり目立たない。左右の壁寄りと中央部に溝がある。床は入口に向って4~5度の傾斜をもち、周壁に排水溝がある。

天井は大部分破壊されたが、中央部に棟木を表現する巾約15cmほどの造出しがあった。そして、造り出しの四隅から、玄室四隅の鴨居まで浅い掘込みが行なわれていた。

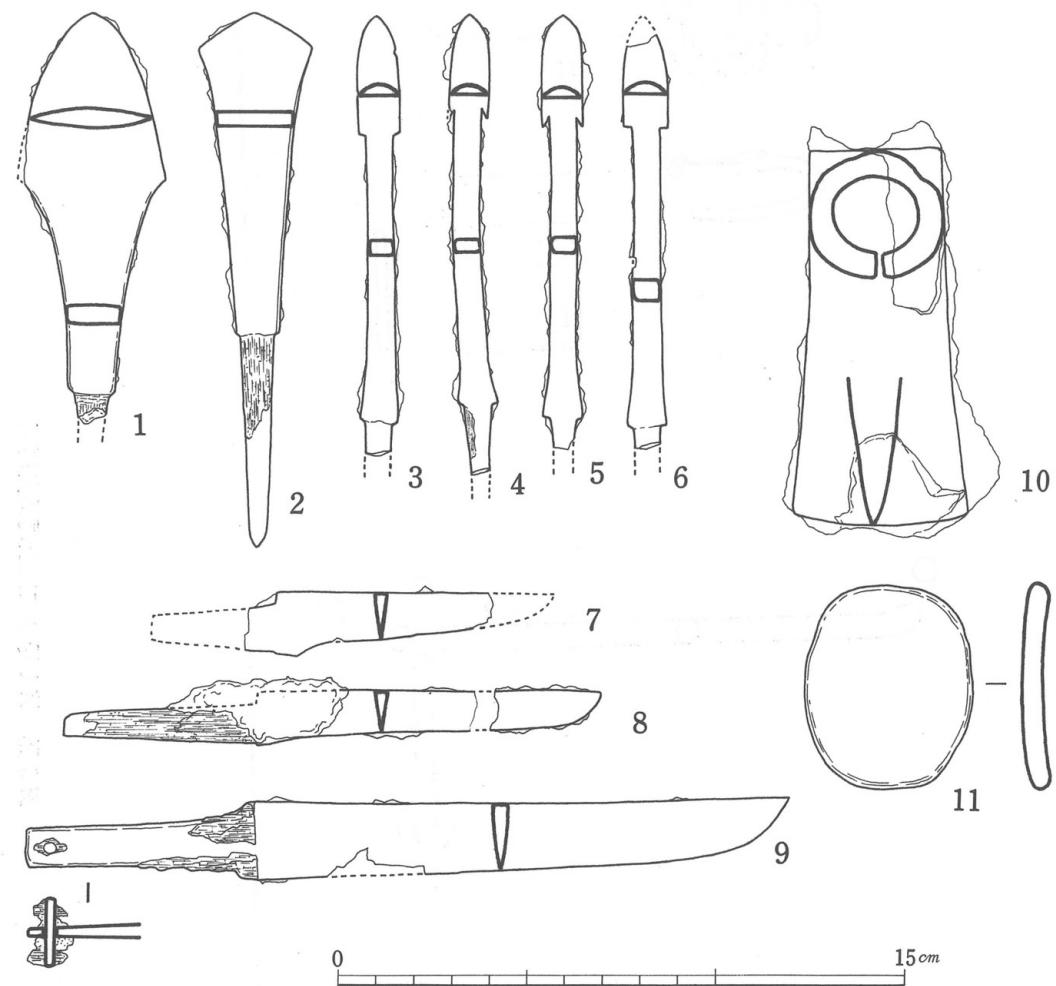
遺物の出土状態は、土器類が主として中央区画の左壁寄りの部分にかたまって発見され、土器片を利用した土製円板は同じく右部分にあった。玉類・武器類および馬具は大部分屍床内で発見されたが、出土状態は必ずしももと置かれていた位置を示すものではなくかなり乱れている。勾玉・水昌切子玉などの玉類は屍床東側において検出された。頭位を示すものとみられる。

出土した遺物には次のようなものがある。



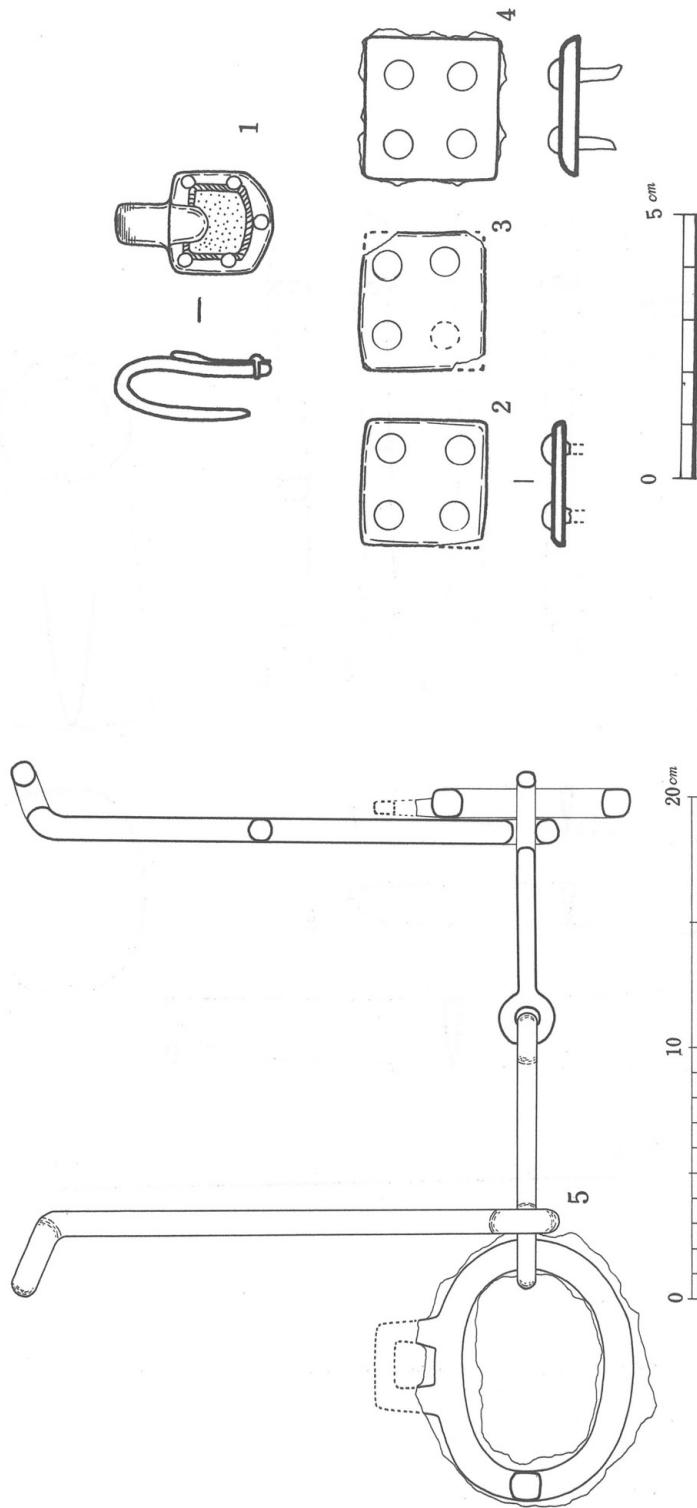
第3図 第1号横穴実測図

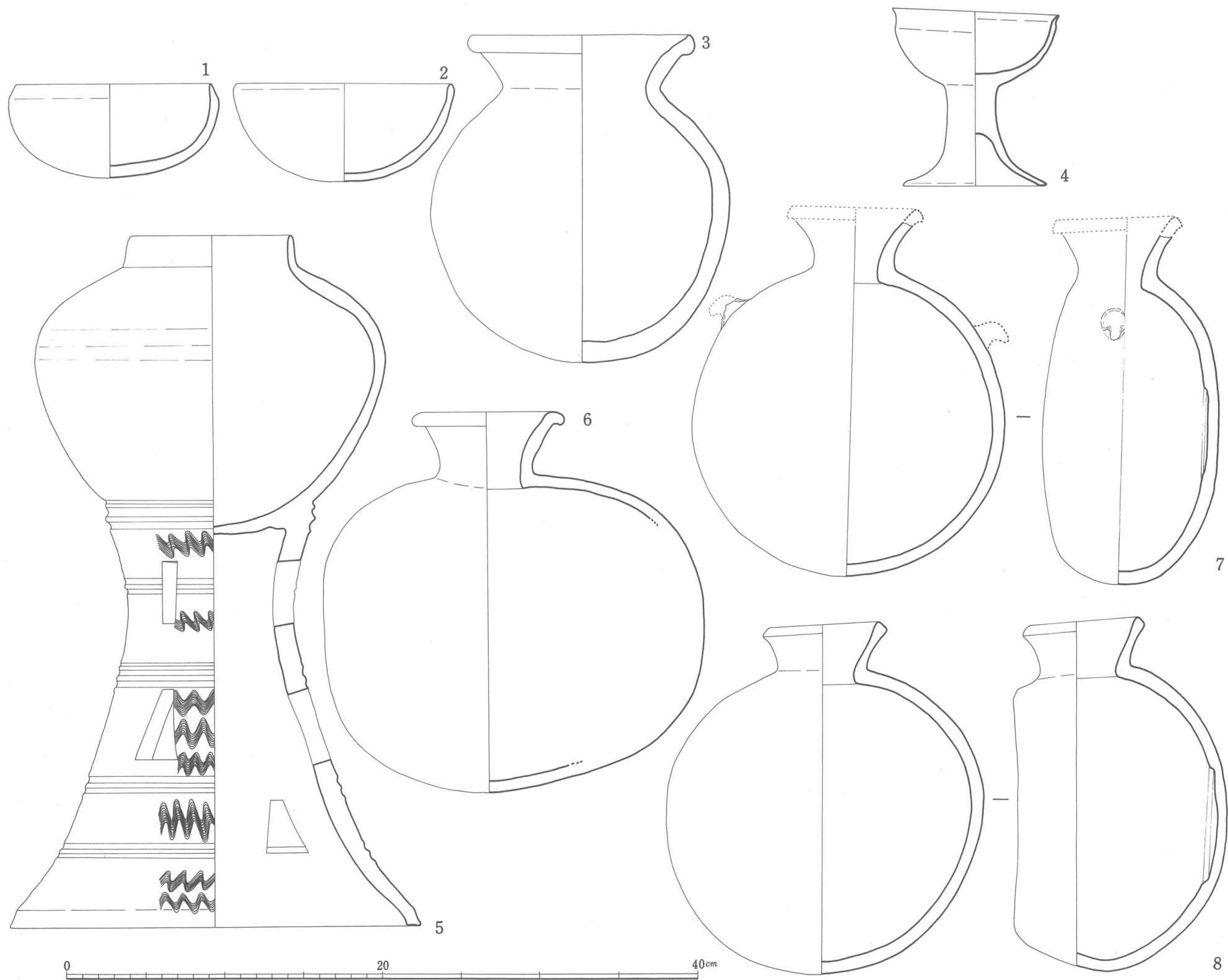
種類		数	形態	挿図	図版	
装身具	勾玉	2	メノウ、水晶、長さはどちらも2.4cm 片割穿孔、仕上げは良好	(37)-1・2	第四三	
	水晶切子玉	4	長さ1.4~1.6cm、6面~7面に仕上げる 片割穿孔	(37)-14~17	"	
	碧玉管玉	13	長さ2~3.1cm、径0.9~1.0cm、片割穿孔、仕上げは良好	(37)-1~13	"	
	ガラス玉	100	コバルト色ガラス玉19、ガラス小玉(コバルト・ブルー)81		"	
鉄器	刀	1	長さ 110cm		第四七	
	刀子	3	屍床内で2本、屍床外から1本出土。全長20.5cmの刀子は茎端に目釘をもつ。短い刀子は研ぎ減りがある。	(4)-7~9	第四四	
	鉄鎌	19	片丸造鑿箭式6、片丸造腸抉鑿箭式5、圭頭広根斧箭式1、両丸造定角式1	(4)-1~6	"	
	斧	1	長さ10cm、袋部外径 3.6cm	(4)-10	"	
馬具	轡	1	長径10.4cmの楕円形環に立闇のついた鏡をもつ。引手は長さ21.6cm。引手間の銜の長さは14.5cm	(5)-5	"	
	金銅製雲珠	1	半球形部の裾と脚の一部のみ遺存。突線で波文をめぐらし谷部に乳状突起を配す。地は刺突文を施す		第四三	
	金銅張懸垂具	2	一方に懸垂用の鉤のついた鉄板にうすい金銅板を鋲留したもの 蛇腹文の縁どりの内側を刺突文で装飾	(5)-1	"	
	帶金具	4	1辺長さ2.2~2.7cmの方形の鉄板に鋲をうつ。3個出土した	(5)-2~4	"	
土器	須恵器	脚付壺	1	高さ44cm、壺部は内面に同心円叩き、外面に平行叩きをもつ。脚部は上方で細くしまる。波状文は浅い。上部に黒色自然釉	(6)-5	第四五
		壺	1	灰白色やや軟質。高さ21cm、胴部上半は平行叩きの上をカキメ仕上げ。器壁が厚い。	(6)-3	"
		横瓶	1	器高24cm、胴部片方がやや平坦につくられる。表面は回転を利用したミズヒキ仕上げ	(6)-6	"
		提瓶	2	側面の一方が平坦なものとなだらかなカーブで扁平につくられたものがある。後者には肩部に把手がつく。	(6)-7・8	"
土師器	坏	2	1、2とも高さは約6cm、1は口径12.3cm内側底部に布痕をもつ。高坏と胎土、仕上げが同じ。2はやや大きく砂粒を含む	(6)-1・2	"	
	高坏	1	坏1と同じ精良な粘土を使用。高さ11.2cm。口縁部径10.5cm。撫で仕上げ。茶色	(6)-4	"	
土製円板		1	長径 5.4cm、短径 4.4cmの楕円形。縁は丸く仕上げ、反りがある。胎土は砂粒を含む	(4)-11	第四三	



第4図 第1号横穴出土遺物実測図

第5図 第1号横穴出土馬具実測図





第6図 第1号横穴出土土器実測図（1、2、4 は土師器、他は須恵器）

(2) 第2号横穴 (図版第八、九、四六)

第1号横穴のすぐ西側にあって、発見時には玄室の奥部を残して破壊されていた。玄室の規模は奥行2.4m、巾2.5mの方形状をなし、短い羨道部をもつ。玄室天井の高さは約1.03mあって、天井部は縦断面形でみると頂部が平坦になるいわゆる蒲鉾形の構造をもっている。入口はもと1号横穴同様板石で閉塞し、その周囲を栗石で控積みしていたものである。床面は豆粒大の玉砂利を敷くが排水溝はもたない。床面のレベルはほぼ1号横穴の天井の高さに等しい。

遺物は、玄室内より鉄刀1、鉄鎌12、銀環2対、ガラス玉12、平瓶が発見され、入口閉塞石の外には須恵器がまとまって置かれていた。器種は高壺・提瓶・壇・横壺・甕などであった。

鉄刀の出土位置は、奥壁中央部、壁に接しておかれていて柄部の方向は西側をむく。

出土した須恵器の形式は、Ⅲ形式の後半に属すると考えられる。

(3) 第3号横穴 (図版第一〇～一二、四七～四九・第7、8図)

2号横穴の西側に隣接して営まれたもので後述する23号横穴との間に位置している。入口はやや小形の板石を2枚並べて扉とし、その下部には栗石を積んでいる。前部より提瓶1が発見された。玄室内部には地下水が充满して、床面には長い間に地下水によって運ばれた微細な粘土が層をなしていた。

玄室の大きさは奥行2.2m、巾2.5mのほぼ方形をなし、中央付近での天井高は1.25mを測る。天井の構造はドーム形と呼ぶ形態である。床面には栗石を敷きつめ、排水溝は周壁および中央に奥から入口方向に切っている。中央部に切った排水溝の上には比較的扁平な栗石を敷き並べて、あたかも玄室内を左右に二分する感がある。

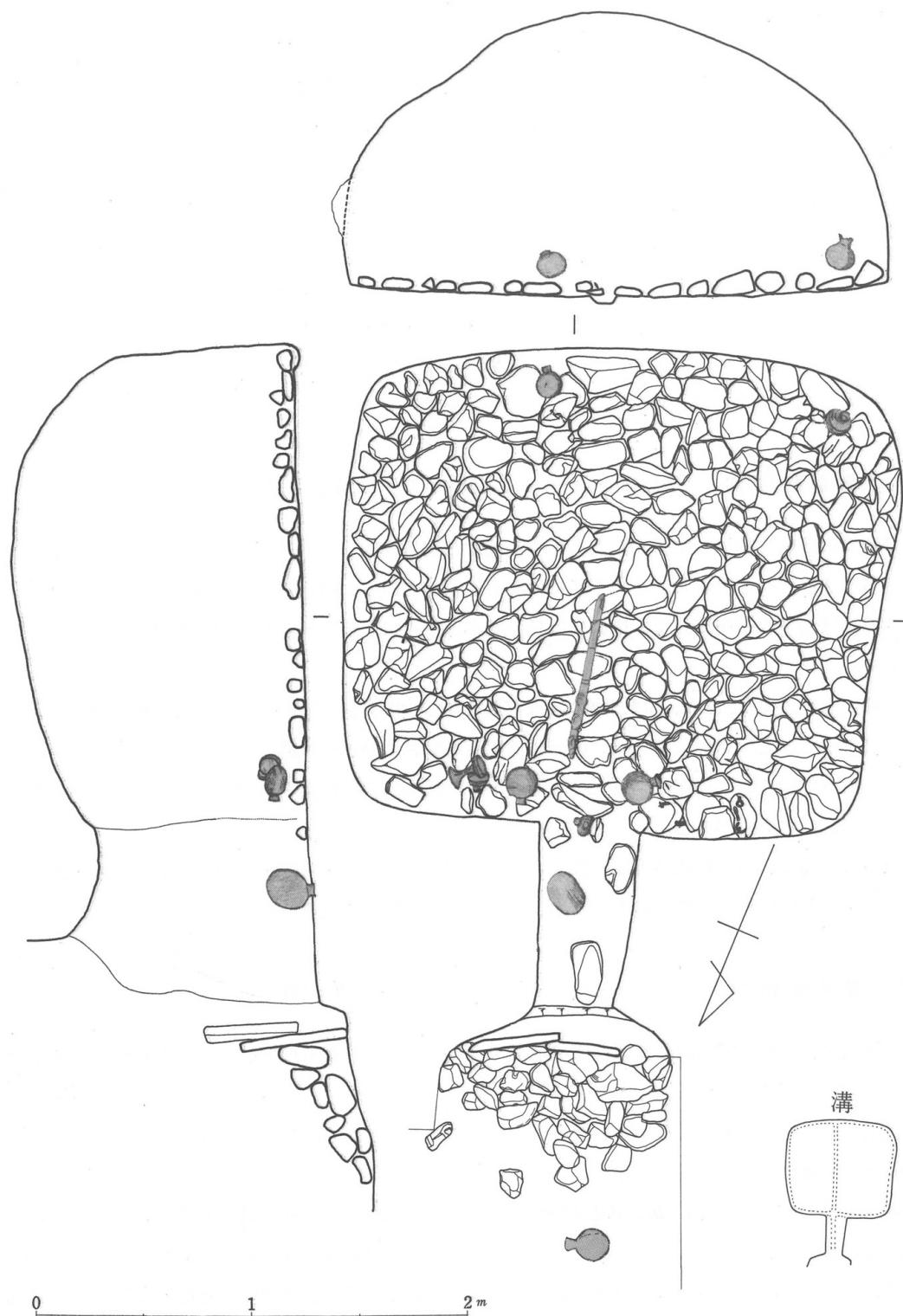
出土した遺物は、異常な数の提瓶に代表される須恵器のほか轡・鉄鎌・鉄刀などがある。須恵器の形式はやや新しい様相を示すものもあるが、Ⅲ形式後半に属するとみられる。

(4) 第4号横穴 (図版第一三、一四、五〇～五三・第9～12図)

4号横穴は、1号横穴と同じく天井部の陥没によって発見されたもので、位置は1号横穴のすぐ西側やや下位に構築されている。

入口閉塞の状態は明らかでないが、栗石が遺存していたことからみて、3号横穴などと同様に、板石を扉として使用していた公算が強い。

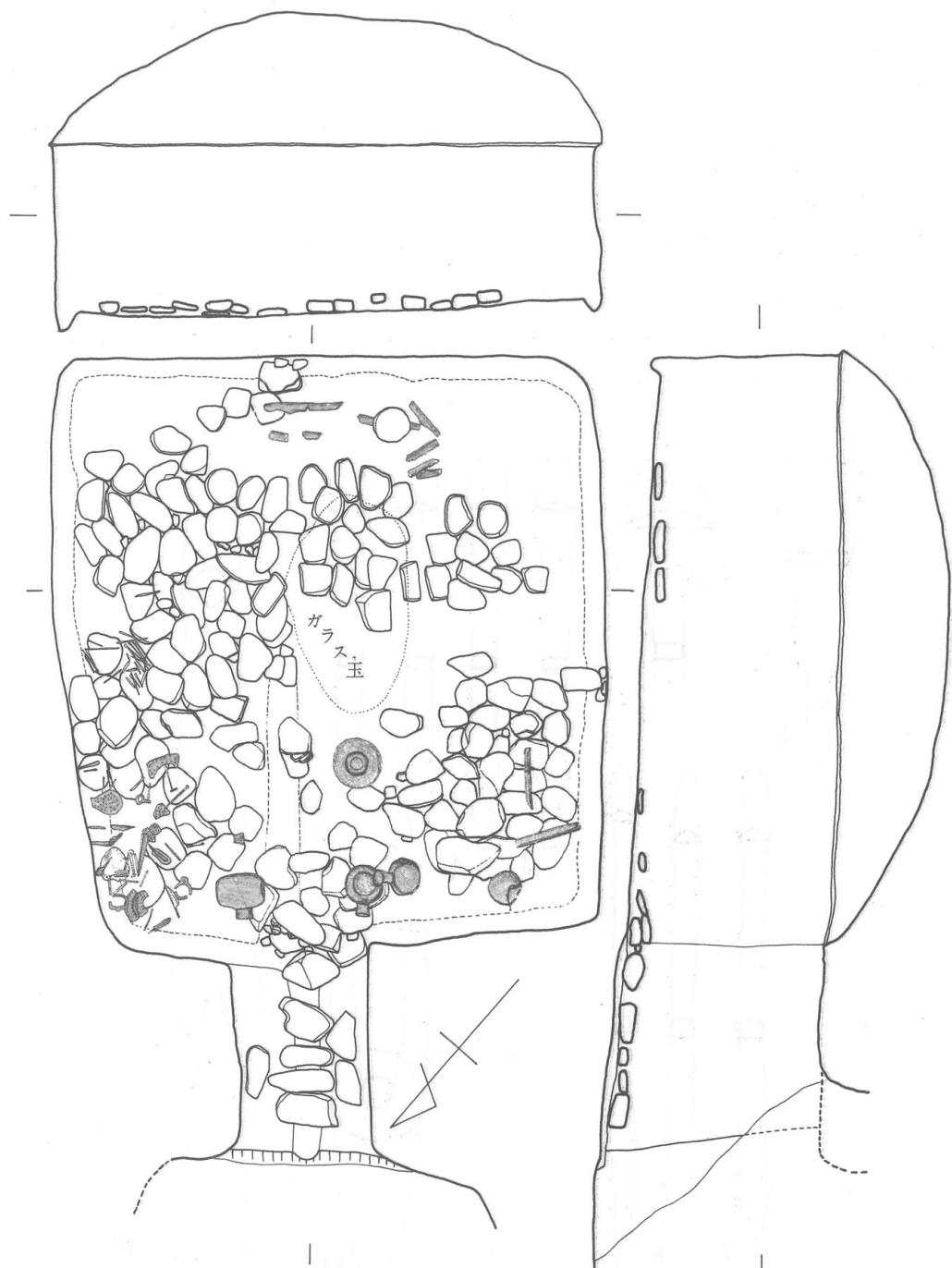
玄室内部の大きさは奥行2.5m、巾2.35mあって、中央付近での天井高は1.2mある。主軸の方位はN 41° W。側壁から天井部へと変るあたりに段をつくって、いわゆる「鴨居」を表現する。天井部の形態は、四壁からほぼ同程度のカーブによって形づくられるもので、ドーム形と呼んでいるものに類似している。ただ、ドーム形天井との違いは天井高がやや低い点にあって、この意味で前出の蒲鉾形天井との中間形態を示すものとみることができる。また、典型的なドーム形を呈する天井形態をもつ



第7図 第3号横穴実測図



第8図 第3号横穴出土須恵器

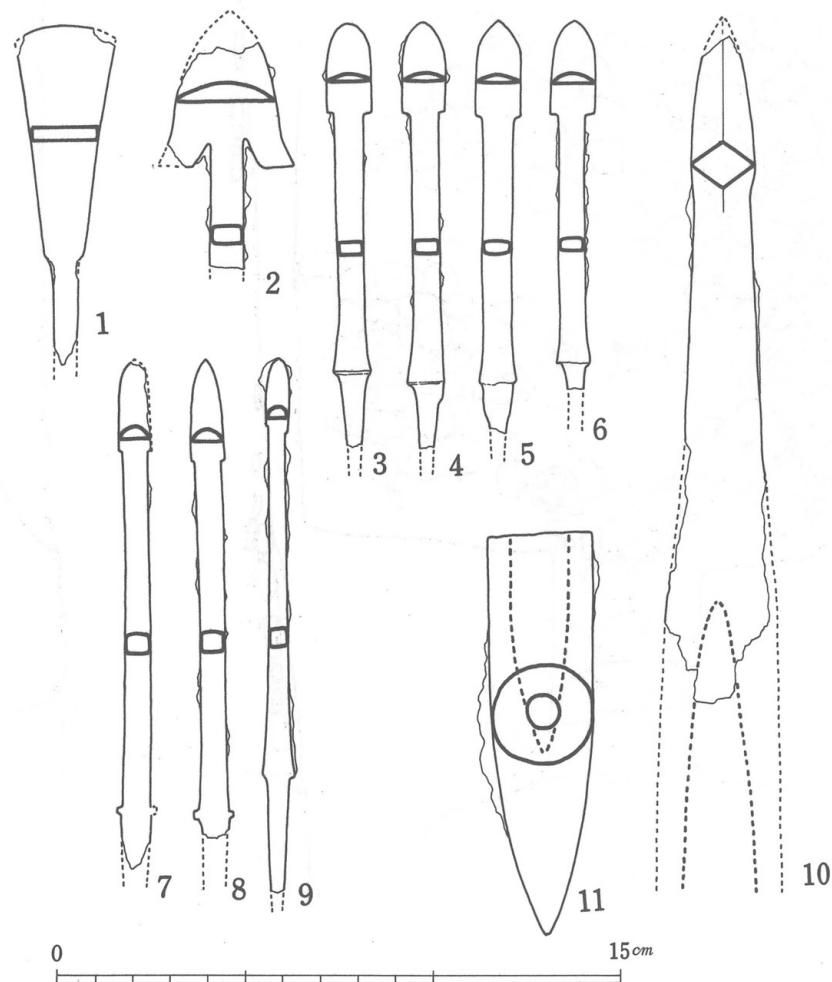


第9図 第4号横穴実測図

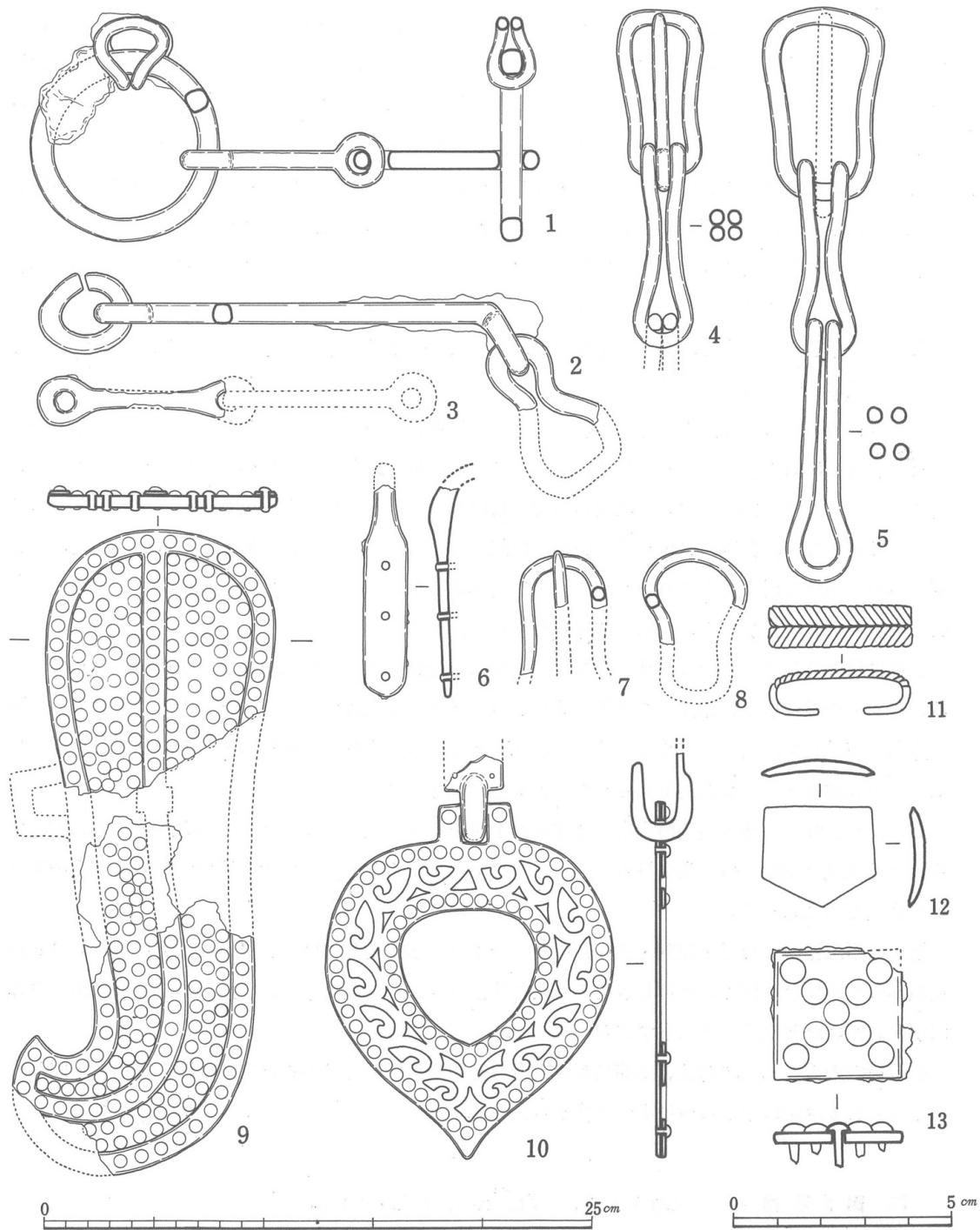
ものには、「鳴居」の構造をもつものがないことも注意すべきである。

床面は礫が敷かれるが、3号横穴の場合では割合に角ばった礫を使用し床面の凹凸がひどいのに対し、結晶片岩の扁平な円礫を敷きつめている点が相違している。同様な礫を床に敷いた横穴は、後述する第25号横穴の第1次床においてみられるにすぎない。排水溝は、周壁沿いにめぐり、また玄室中央部から入口方向に流す溝が切られている。

この中央に切られた溝によって玄室の入口に近い部分が左右に分割された形となるが、奥壁に向って左側の狭い部分でこの4号横穴を特徴づける馬具類はじめ鉄鎌・鉄鉤などの鉄器類がまとまって発見されたことから、この場所が貴重な副葬品の置き場をなしていたことが考えられる。これに対し土器類は反対側の入口に近い部分から発見されている。鉄刀は奥壁寄りと、右壁側の二箇所に散在した状態でみつかり、メノウ勾玉、ガラス玉などの装飾品は玄室中央部において検出された。



第10図 第4号横穴出土鉄器実測図



第11図 第4号横穴出土馬具実測図

玄室内は他の横穴同様、堆積した粘土層によっておおわれていたので、遺物の発掘作業は困難をきわめたが、出土遺物のうちとくに興味深い出土の状態を示すものは杏葉である。杏葉は大形の心葉形をした金銅張りのもので3枚が副葬されていたが、これら3枚が上下に重ねられた状態で発見された。おそらく他の遺物類も整然とした状態で置かれていたのであろう。

遺物は、装身具として、メノウ勾玉1・ガラス玉、武器に、鉄刀2(+)・石突きを有する鉄鉾・鉄鎌約30本がある。鉄鎌の種類としては、方頭広根斧箭式および笠被広鋒片丸造脇抉三角形式がそれぞれ1本ある。他は鑿箭式に属するもので棘笠被の形式とそうでないものとの二種類あつて先端の形状、笠被の長さなどやや異なる。

また、4号横穴の遺物では馬具類を忘れてはならない。轡2、鏡板1対、杏葉3、兵庫鎖、帯金具、鎧金具などがある。

鏡板は鉄製の大形品で復原長約30cmほどになる。徐々に巾を狭めて細くした先端を釣針状にカーブさせて、全体に鉢を打って装飾としている。対をなす鏡板のどちらも中央部分を欠損しているため、銘を通す孔と立闇の構造については明らかではないが、破片からみて銘を通す孔の形が方形となることはまちがいない。全体に銹化が著しいが鉢に銀張りの痕跡をうかがえる部分がある。形態的にはS字形鏡板の系統を引くものであろうが、つぎに述べる杏葉とともに重量のある大形品で、しかも全体を鉢で埋めつくす技法などいかにも洗練されない感がある。

杏葉は鉄製で長さ約15cmの心葉形をなす。上部に立闇がついてこれに懸垂金具を遺存したものもある。表面の文様は小さい心葉形を内部に透し、鉢で縁どりした外側の部分には、中央でふり分けた同一方向の蕨手文を地文として残して透彫りを行なっている。内側の心葉形の部分および透しの部分には金張の痕跡をとどめ装飾的であるが文様はすでに硬化している。

このほか、(11)は鉄地銀張りの責金具で2本が1組となってくつついており、3組分発見されている。(12)は鉄地金銅張りの帯先金具とみられるもので1個出土した。(6)は木心鉄板張鎧の鎧軛との連結用の金具と考えられる。

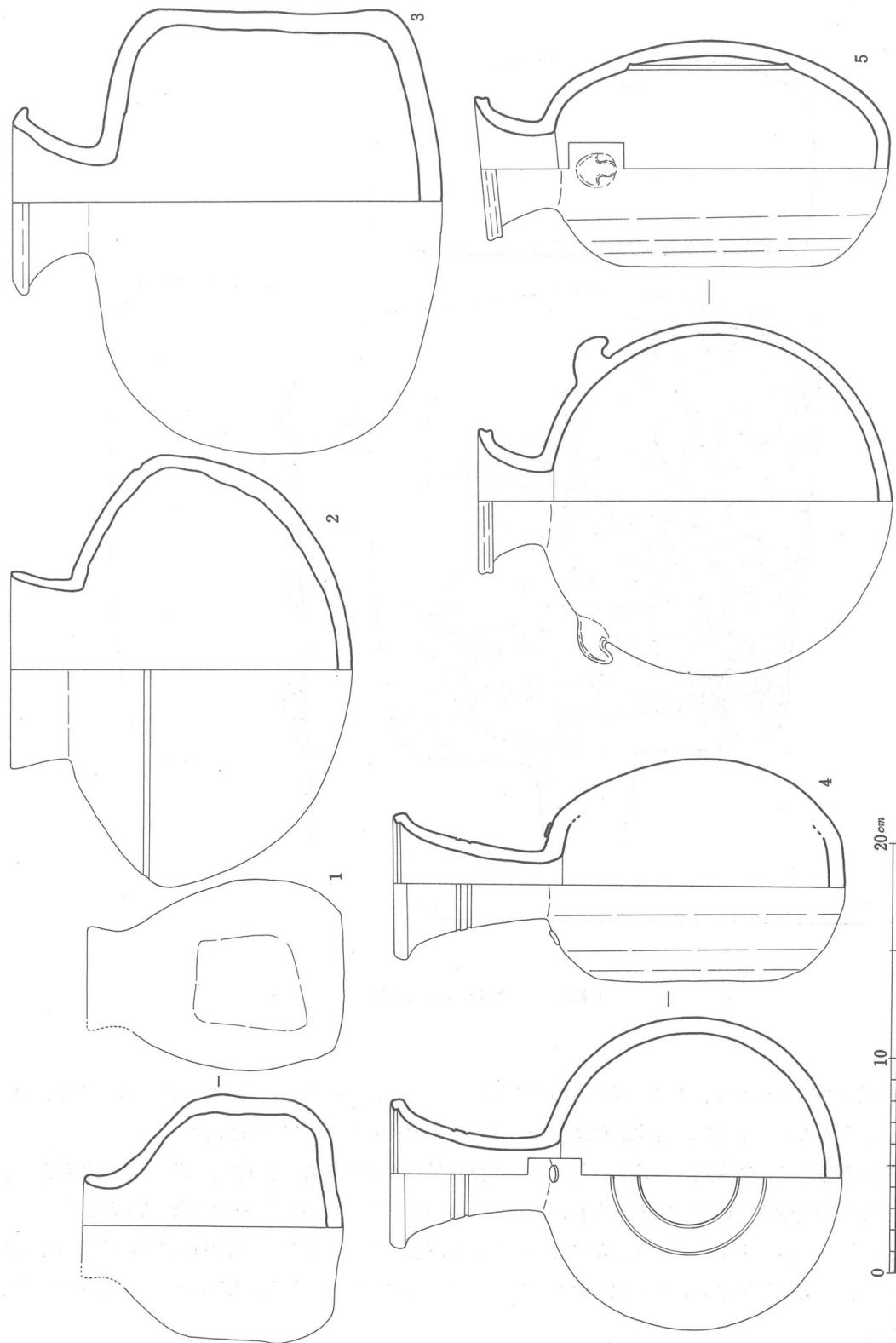
土器は須恵器の大形壺・提瓶・横壺、提瓶形の土師器が出土している。提瓶には2形態みられるが長頸形のものは、洗練された美しさをそなえた仕上げのよい製品である。提瓶形の土師器はあまり類例がないが、胴部は球形とならずに箱形につくられている。

4号横穴の営まれた時期は、副葬品の組み合わせや須恵器の形式からみて、ほぼ1号横穴と同じころとみられ6世紀の中ごろ～後半の年代が与えられよう。

(5) 第5号横穴 (図版第一五、一六、五四、五五・第13図)

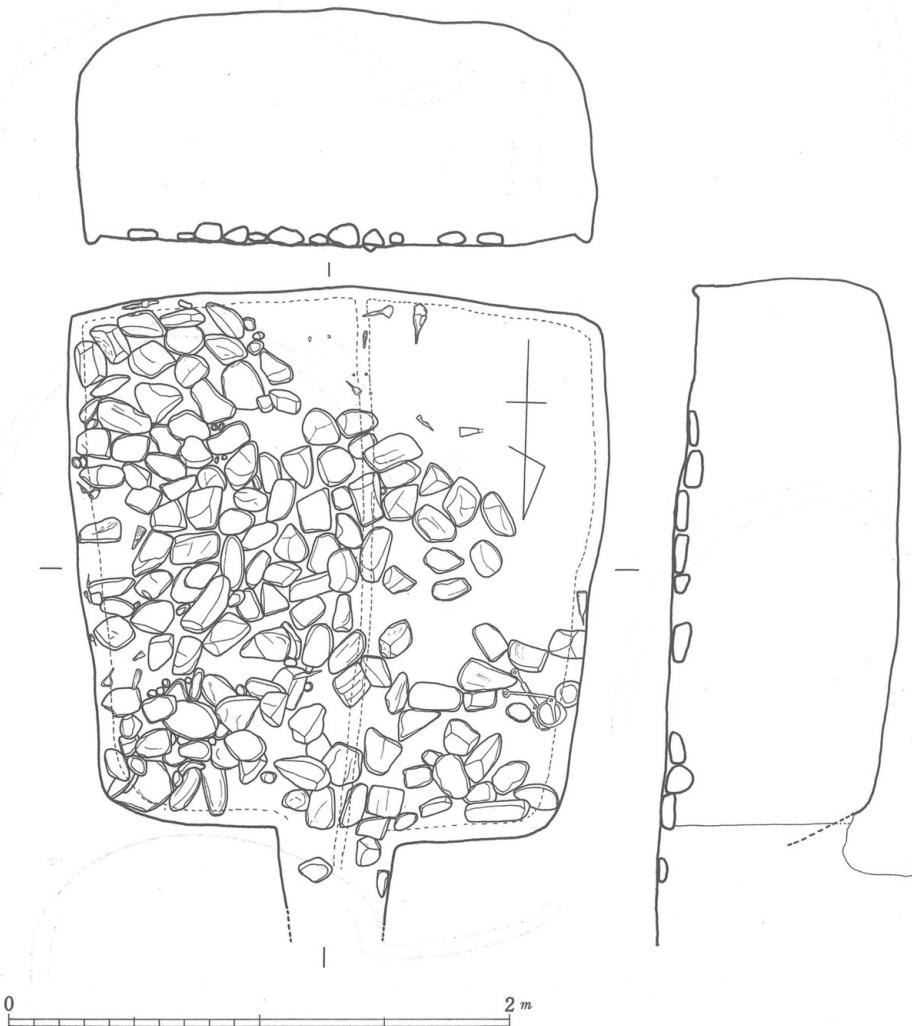
5号横穴は1号横穴の下位にあって、東側のグループではもっとも低い位置に営まれた横穴である。入口の部分は調査前に破壊されて閉塞の状態は明らかでない。

玄室の大きさは奥行2.15m、横巾は入口側でやや狭くなつて厳密には逆台形状に近い形態をとる。中央部分での横巾は約2.06m、高さは0.9mときわめて低くいわゆる蒲鉾形と呼ばれる玄室である。



(1 は土師器、他は須恵器)

第12図 第4号横穴出土土器実測図



第13図 第5号横穴実測図

床面は礫が敷かれるが、3号横穴あるいは4号横穴のように玄室全体に敷きつめたものでなく、南西隅はほとんど敷いてない。排水溝は玄室の周囲と中央部に入口方向に切られている。

遺物としては、装身具に耳輪1、勾玉1、水晶切子玉6、ガラス小玉122、不明小鉄環2がある。ほとんどが奥壁寄りの部分で発見されたが、ガラス玉は2群に分かれ玄室中央部からも検出した。一方、武器類には、刀1、刀子3、鉄鏃15があり、玄室奥壁に向って左側の壁沿いにその大部分がおかれていた。刀は橢円形をした8窓の锷がついている。このほか右壁側入口寄りのところから轡が発見された。

(6) 第 6 号 横 穴 (図版第一五、五六)

6号横穴は5号横穴のすぐ東側にあって、床面レベルはやや高い。

横穴の大きさは奥行約2.15m、巾約2.1mの玄室に0.8mの羨道部がつく。玄室主軸の方向はN40°E。天井の高さは中央付近で1.1mとそれほど高くはないが形態はドーム形に近い。床面は礫が敷かれ凹凸がはげしい。排水溝はない。

入口の閉塞は、板石と控積みの栗石によって行なわれる。

遺物は、内部からガラス玉5、鉄鎌1を検出したにすぎない。また閉塞部において土師器および須恵器の破片が発見された。形のわかるものとしては、須恵器IV形式後半に属する坏がある。

(7) 第 7 号 横 穴 (図版第一五、一七、五六・第14図)

6号横穴のすぐ東側にあって、両横穴の間の壁が崩壊して一つづきになってしまっている。床面レベルは約40cmほど7号横穴が高い。

玄室は一辺約2.2mほどの隅丸方形をなし、形態は蒲鉾形である。構造上とくに注意されるのは、板石を二重にした入口の閉塞方法と内部の排水溝である。

閉塞は1枚目は結晶片岩の厚手の板石を横形にして置き、これと10cm前後の間隔でさらに2枚目の板石をこんどは縦状に据えていた。そして2枚目閉塞石の下部には栗石の控積がみられた。

6号横穴同様閉塞石のまわりからは破碎した須恵器片が数点発見された。

玄室内部は礫が敷かれる。礫をとり除くと、床面は奥壁に向って玄室の右側部分がやや高くつくられて、ベッド状の構造をもち、ここに5本の排水溝が切られていた。左壁側には礫が右側より密に敷かれるがこのような構造はない。したがって築造当時に意図された屍体安置の場所は右側部分であって棺台としての構造をなしている。

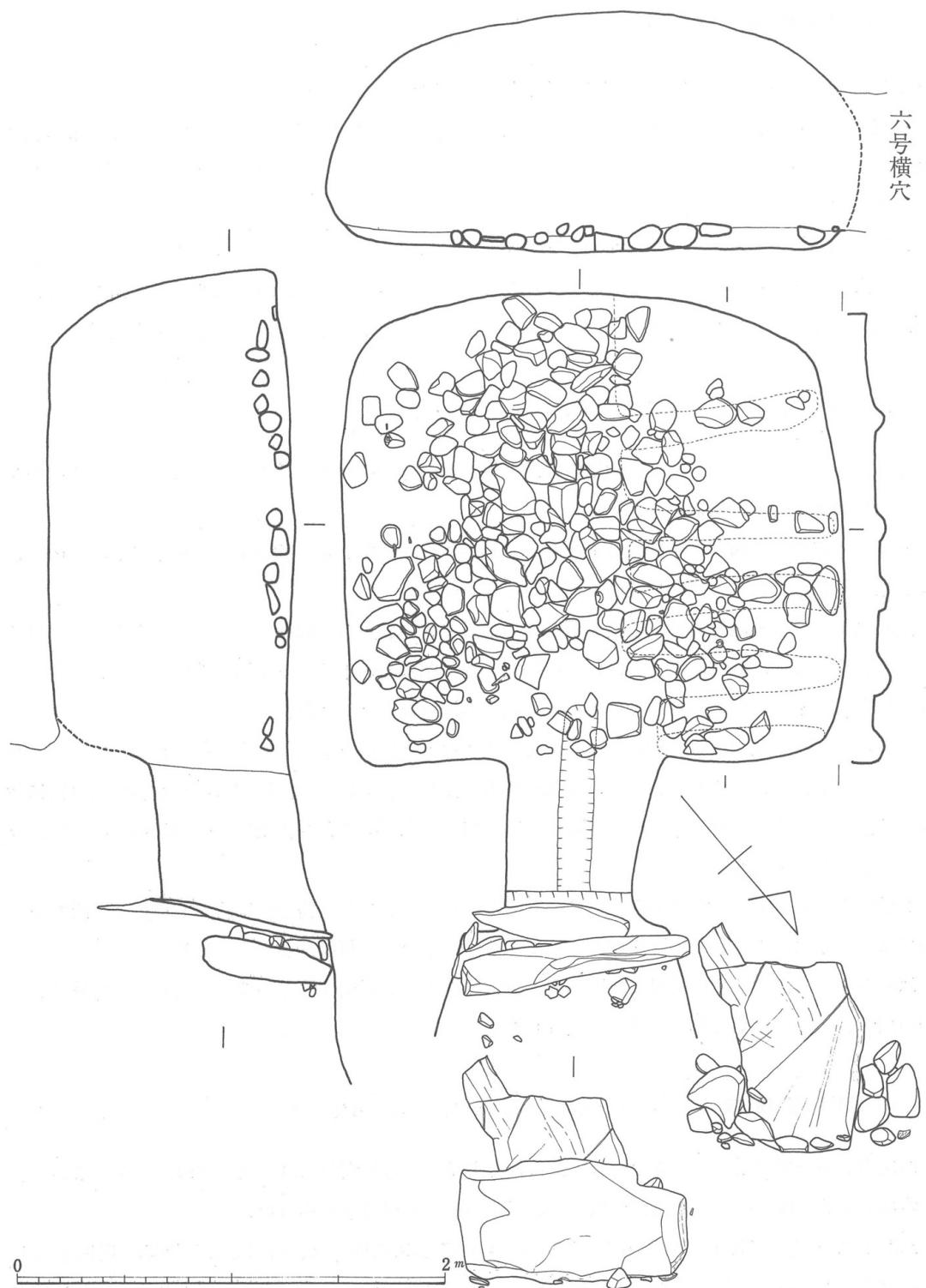
6号横穴および7号横穴の場合、いずれも内部から発見された遺物が断片的であり、また閉塞部周辺にまとまらない破粹した土器片があったことからみて追葬の可能性が考えられる。

玄室内部からは、メノウ製勾玉大小各1、碧玉製管玉1、銀環3などの装身具類とともに鉄鎌、刀子の断片、帯先金具や尾錠の一部が発見された。

(8) 第 8 号 横 穴 (図版第一九、二〇、五六、五七 第15、16図)

西側のグループで最初に調査を行なった横穴である。1号横穴からはおよそ60mほど離れていて、道路にかかる丘陵先端部の西端に位置する。現水田面からの高さは約4m。

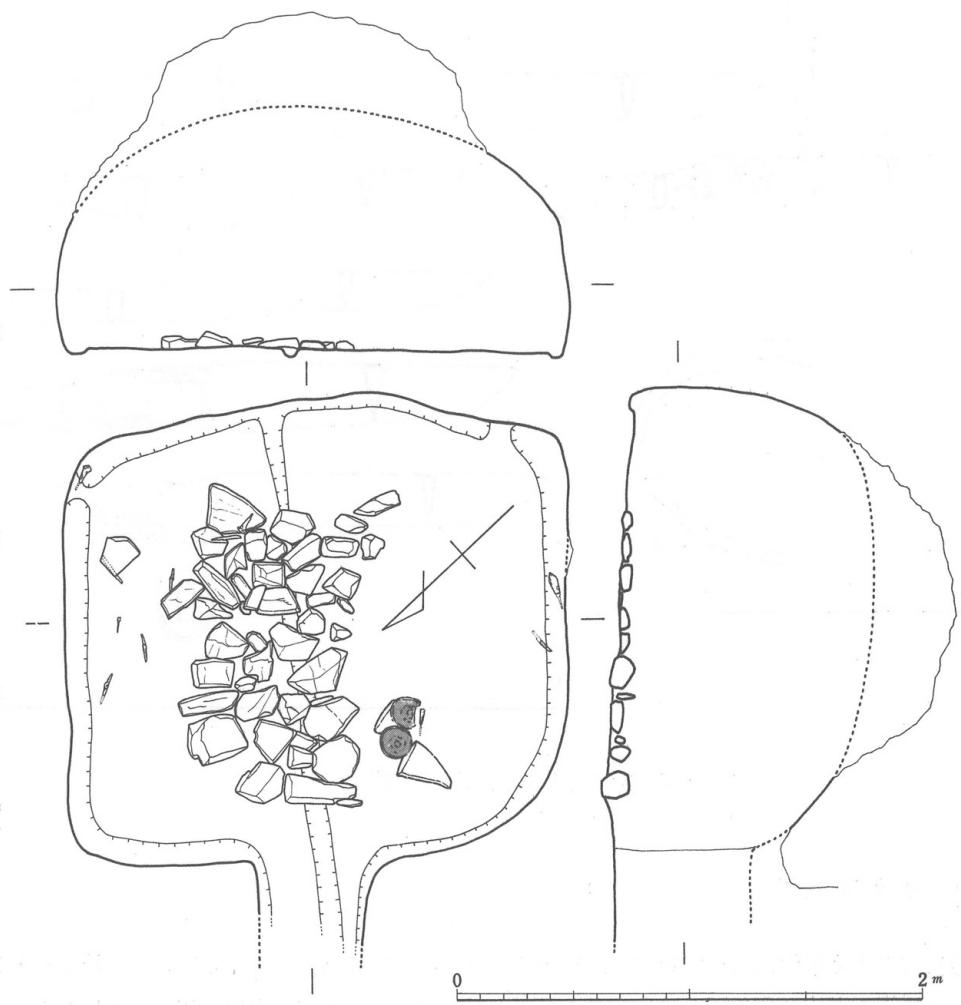
玄室主軸の方向はN47°Wを測る。入口部分は調査前に破壊され、内部でも天井部の崩壊が著しい。玄室の大きさは、奥行2m、巾2.15mあり、平面の形態は不整形の隅丸方形をなす。内部は礫が敷かれているが、全面を覆うものではなく、玄室中央部に長さ約1.3m、巾約0.7mの範囲を限って敷き並べ、あたかも棺台をなすかのようである。このような敷き石の方法は、31号横穴にもみられたと



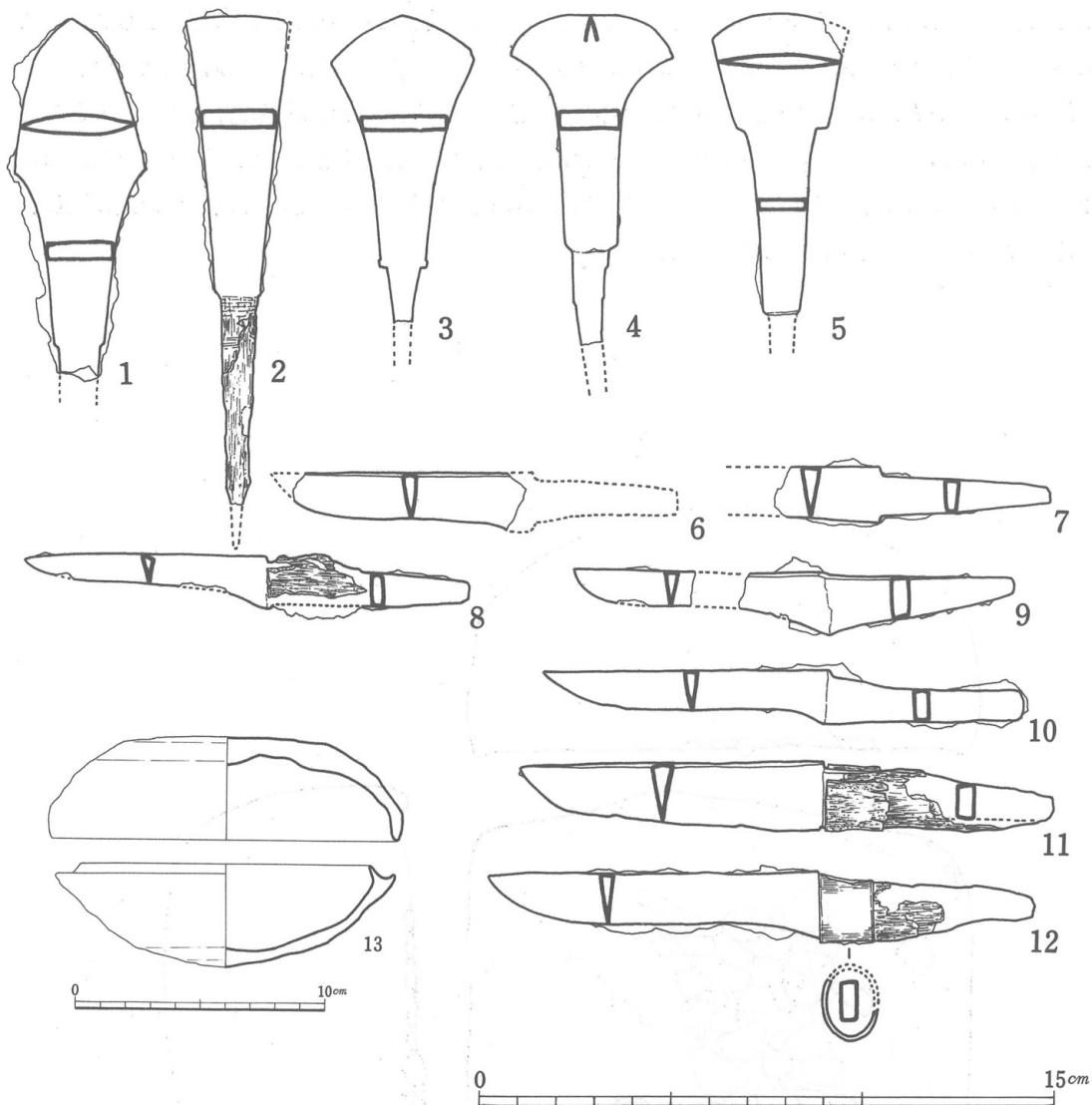
第14図 第7号横穴実測図

ところで、そこでは耳輪および釧が出土したが、いずれも礫の敷かれていない周囲の部分から発見されている。したがって、玄室中央部のみ敷かれた礫上に屍体を安置したものかどうか確証はない。

遺物は、刀子7、鉄鎌6が玄室の礫のない部分で散在して発見された。鉄鎌は斧箭式のものと有茎定角式のいずれも大形の鎌ばかりである。そのほか、須恵器の壊があるが、これは本来身と蓋がセットをなすものではなく寄せ集めの状態である。器形の特徴からみて身の方がやや新しい形式に属し、須恵器IV形式前半に含まれるものである。



第15図 第8号横穴実測図



第16図 第8号横穴出土遺物実測図

(9) 第9号横穴 (図版第五七)

8号横穴のすぐ東側にあってレベルは60cmほど高い。すでに玄室の半ぐらいまで破壊されていた。内部ははやくから土砂に埋った状態とみられ、発掘を進めると周囲の崩壊を招く危険性があつたため内部の調査はみあわせた。

採集した遺物として須恵器壺の身がある。壺は蓋受け立上りが低く内傾する比較的扁平な形態のものでIV形式前半に属しよう。

(10) 第10号横穴 (図版第五七)

9号横穴に隣接して構築されているが、床面はやや低い。天井部に亀裂が入って危険のため、玄室西側の部分については調査できなかった。羨道部は調査以前に破壊されていた。内部はこまかい玉砂利敷きの床で奥に向ってやや狭くなる小形の玄室である。奥行が約1.9mで中央部に入口方向に排水溝がある。

遺物は、奥壁よりから鉄刀片がみつかり、床面全体に鉄鎌約27本、刀子2が散乱していた。また装身具としてガラス玉3、安山岩質の素材を使った管玉1が検出された。

鉄鎌の形式は、大形のものに有茎五角形式、斧箭式があり、実用的な小形鎌として小さな腸抉のつく鎬造鑿箭式、三角形式、片刃箭式などがある。

土器は須恵器提瓶が床面で発見され、奥壁に近いところで歴史時代に入る土師器壺がみつかった。歴史時代になって再利用した可能性がある。

(11) 第11号横穴 (図版第六〇)

10号横穴の東側約2mの位置にある。床面のレベルは8号横穴に一致しており、10号横穴より約60cm低い。横穴の発見直後に内部を観察され、出土遺物についても明らかではない。

玄室は奥行2.1m、巾1.9mの整った造りで、床面には礫が敷かれ壁沿いに溝が切られる。天井は高さ1.05mあって、蒲鉾形に近い形態である。入口閉塞の状態は不明である。

遺物は、釣針状鉄製品、刀片、片刃箭式鉄鎌が発見された。

(12) 第12号横穴

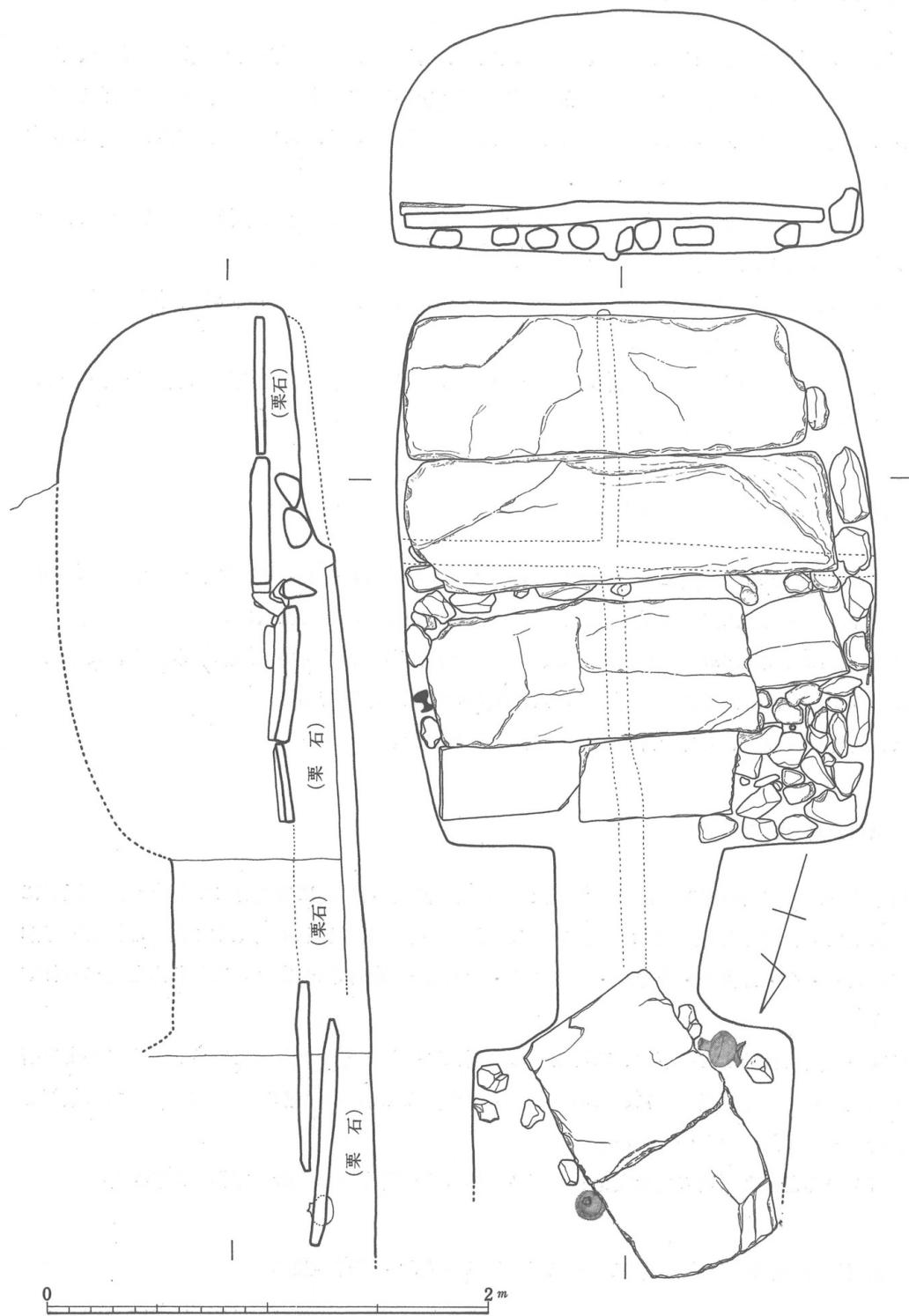
昭和20年4月に防空壕の掘鑿中に発見されたもので、今回調査以前に破壊されてしまった。記録によれば、玄室は巾、奥行とも約2mほどあって、天井の高さは約1.5m。入口は大きな板石で塞がれ、内部には壺・瓶・台付壺・合せ壺・有蓋高壺・短剣などの副葬品がまわりにきちんと並べられていたという。

12号横穴の位置は11号横穴の下位、13号横穴の西側に隣接してあったものである。地元の郷土史研究家太田亘氏の所有する写真の中に、この横穴から出土した壺があったが14号横穴出土の壺に類似しており、時期もほぼ同様のものであろう。

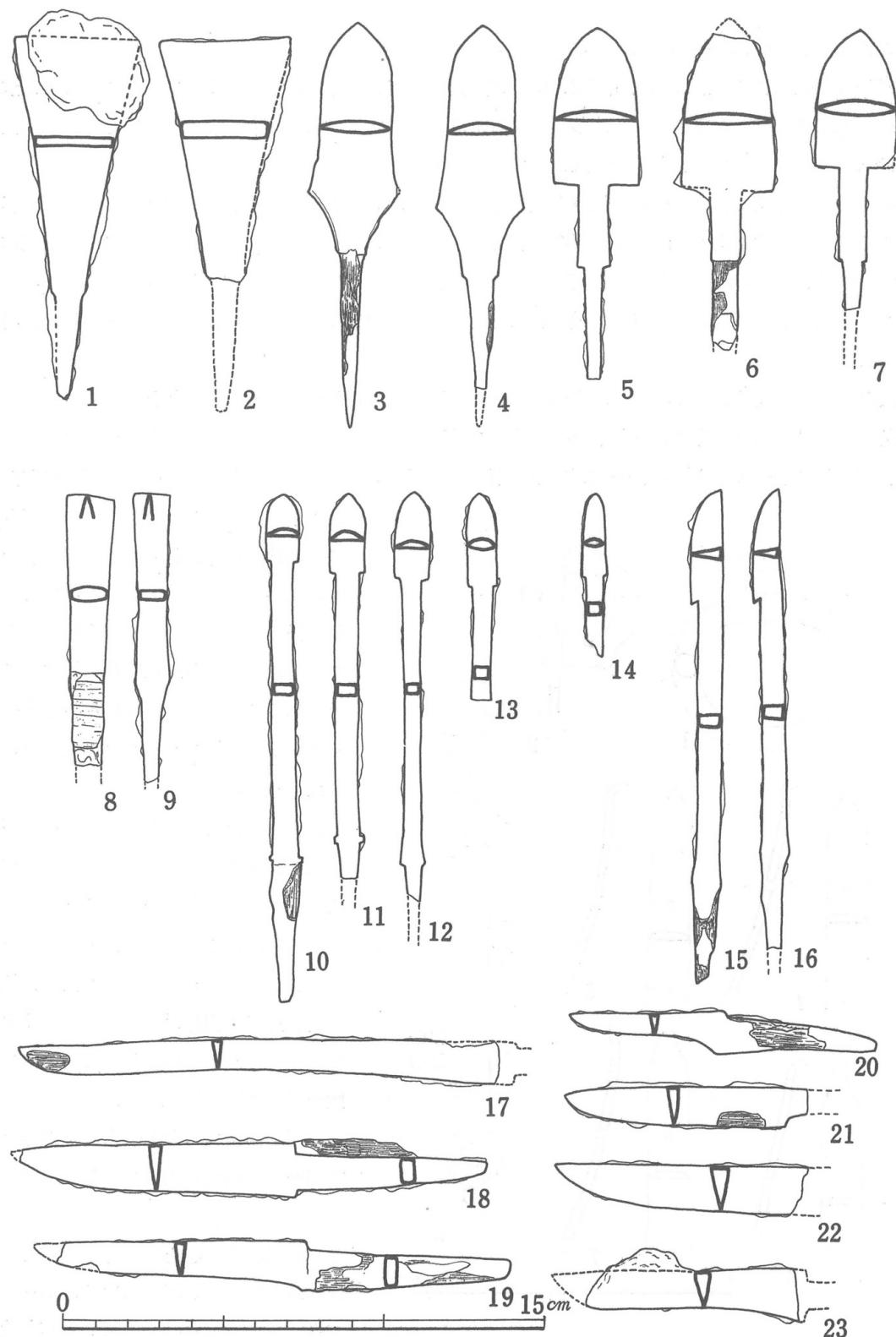
「坂ノ市を中心とした原始時代の文化」 坂ノ市地区教育研究会郷土研究部編 昭和33年

(13) 第13号横穴 (図版第二一~二三、五八~六〇・第17~20図)

8号横穴から約12mほどの距離があって、飛山横穴群のなかではもっとも低い位置に構築されている。1号横穴のある東側のグループでは5号横穴がもっとも低かったが、13号横穴はさらに約3.5m



第17図 第13号横穴実測図



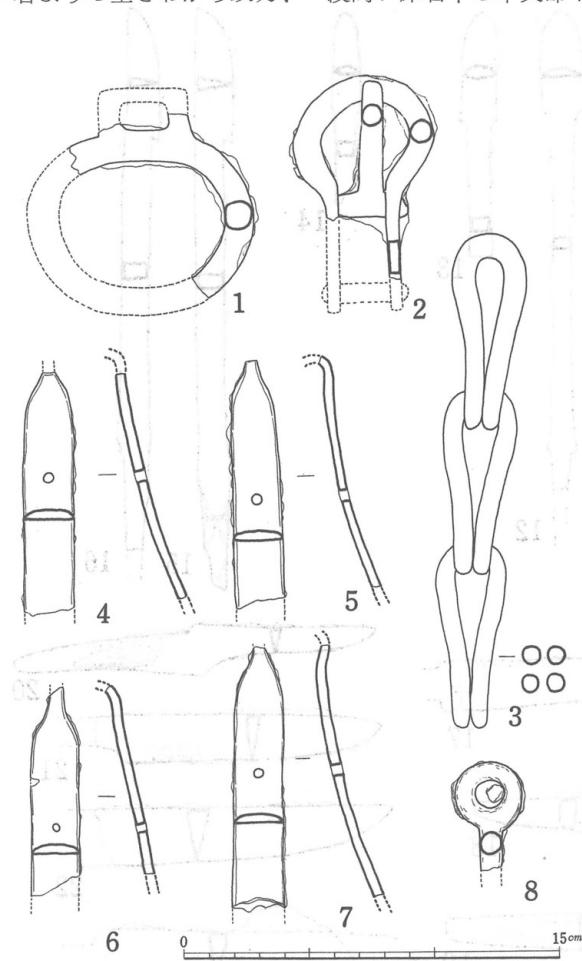
第18図 第13号横穴出土鉄器実測図

ほど低く現水田面に近い高さである。

玄室の規模は、奥行が2.5m、巾が2.1mほどの長方形で、天井部は半ば近く破壊されてしまったが推定高1.3mほどとみられる。しかし後述するように敷石が高いため内部では非常に低く感じる。玄室には約0.9mの長さの羨道がつき入口にいたる。主軸の方向はN5°Eである。

この横穴の特徴は、大形板石を使った敷石床にある。巾50~60cm、長さ150~190cmの大形板石を奥壁にそって三枚敷き並べ、間隙を小形の板石で埋めている。また羨道外の入口付近にも二枚の板石が重なって敷かれていた。玄室内部の板石の敷き方は、奥壁から二枚の板石がほとんど玄室巾いっぱいのものを使用して、しかも入口側に敷かれたものより約15cmほど高くつくられ明確な屍床（棺台）を形成している。

入口部分の調査は、玄室内調査がすべて終った後に行なわれたので、この板石敷きの床面を露出した段階で発見された遺物は、一段下った板石の奥壁に向って左より壁ぎわのところから須恵の小形高坏、右よりの壁ぎわから鉄刀、一段高い床石下の中央部やや左よりのところから土師の大形坏などが



第19図 第13号横穴出土馬具実測図

あつたにすぎなかった。土師の大形坏は、鉄鉢形と呼ばれる形態に近く、内面にはへら描きの暗文が施されて黄茶色を呈し焼成はよい。この土器のもつ諸特徴はこれが歴史時代に属することを示しており、小形高坏の時期と少くとも二回の埋葬が行なわれたことが考えられた。

ところが板石を除去すると、その下には栗石が敷きつめられ、玄室の入口側、すなわち板石が一段低く敷かれていた部分の右壁よりから銀環が9個発見され、左部分からはおびただしい鉄鎌と、馬具・刀片などの鉄製品が検出された。これらはいずれも板石の下に敷かれた栗石の間や下部にあつたから、明らかに板石敷きの床を使用した時期を遡る時期に副葬されたものであった。

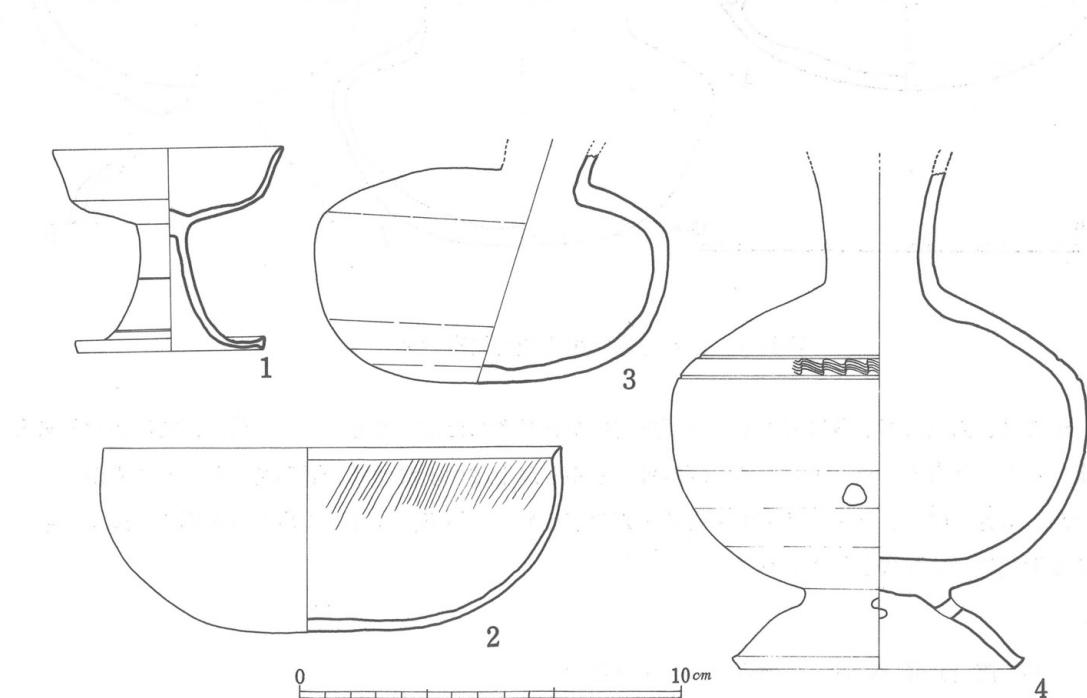
さらに、栗石をとり除くと十字形に排水溝が切られ、床面は奥壁側がもともと一段高く造られて最初から棺台状を呈する構造をもつものであることが

知られた。

また、入口部分の発掘では須恵器の平瓶と脚付の長頸壺および甕破片などが、板石の下につき込まれたような状態で発見されてことでも板石が後の時期に敷かれたことを示していた。入口の閉塞状態は明らかではない。

玄室内出土の遺物は水洗の結果も含めて、装身具として、銀環9、碧玉管玉1、土製練玉9が発見され、武器類には、鉄刀1、刀子7のほか96本の鉄鎌が確認された。鉄鎌の種類は大きく8種類に分類されるが、とくに片刃箭式および広鋒の柳葉式を大量に有する点で顕著である(IV.「武器」参照)。馬具は、楕円形の鉄環に立闘がつく形式の鏡をもつ轡の断片と、兵庫鎖に尾錠の付属する部分および鎧金具の残片(第19図4~7)がある。このほか鉄製品としては、鍔、鉗、鎧金具などの刀装具や棺釘が検出された。土器には、前述の土師器の壺、須恵器高壺のほかに玄室内から須恵器壺の蓋小破片が出土した。入口部分からは、平瓶、脚付長頸壺、甕片が発見された。これらの土器の示す年代は、蓋が須恵器Ⅲ期後半に属するもので、小形高壺・脚付長頸壺はこれに後続する時期の須恵器とみとめられる。また、大形の土師器壺はその特徴から歴史時代に降る遺物である。

これらの結果からみて、13号横穴は6世紀後半に築造され何度か埋葬が行なわれた後、歴史時代に入って再利用され、その際に板石が持ち込まれて床面に敷き並べられたものと推察される。なお、水洗の際に歯が3本発見されたが出土の位置は明らかでない。また、使用された板石には両面に朱が付着しており、大きさからみて石棺をこわしてその石材を利用したことが考えられる。

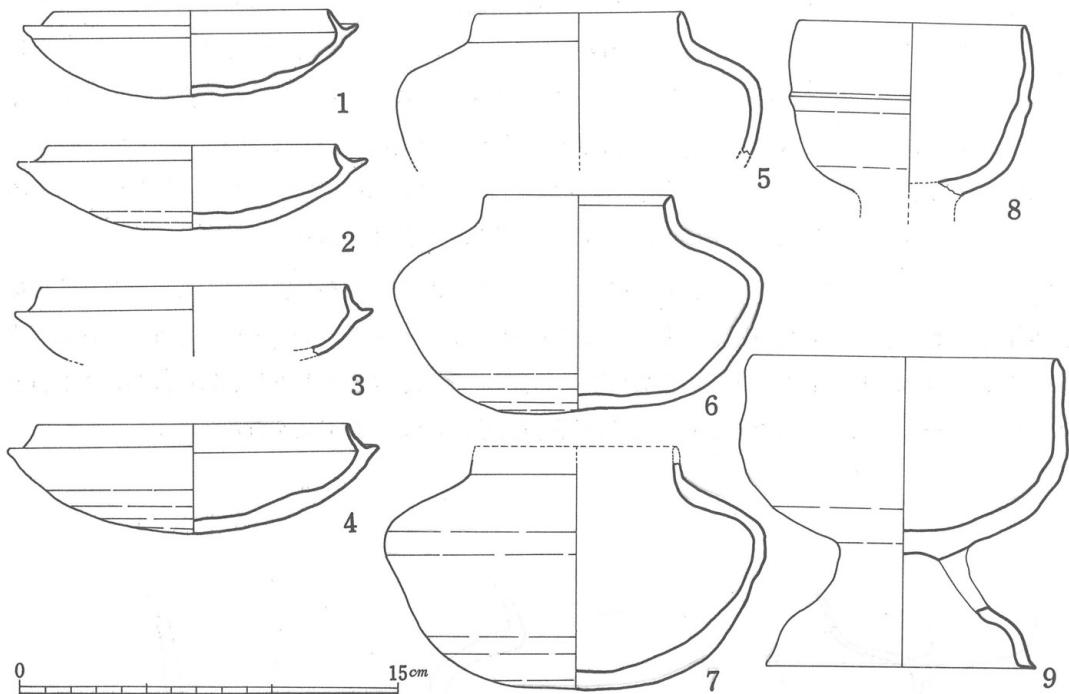


第20図 第13号横穴出土土器実測図(須恵器1、3、4、土師器2)

(14) 第14号横穴 (図版第二四、六一・第21図)

13号横穴の東側にあって、床面レベルは約2mほど高い。玄室の規模は奥行が2.05m、巾2.1mあってほぼ方形のつくりである。天井の高さは0.95mと低く鴨居をめぐらす。主軸の方向はN16°E。

玄室内は礫を主体にして敷石が行なわれているが、一部に小形板石も使用されている。排水溝はない。入口の閉塞は、薄い板石を二枚重ね合わせて扉としその下部周囲に栗石を控積みしていた。



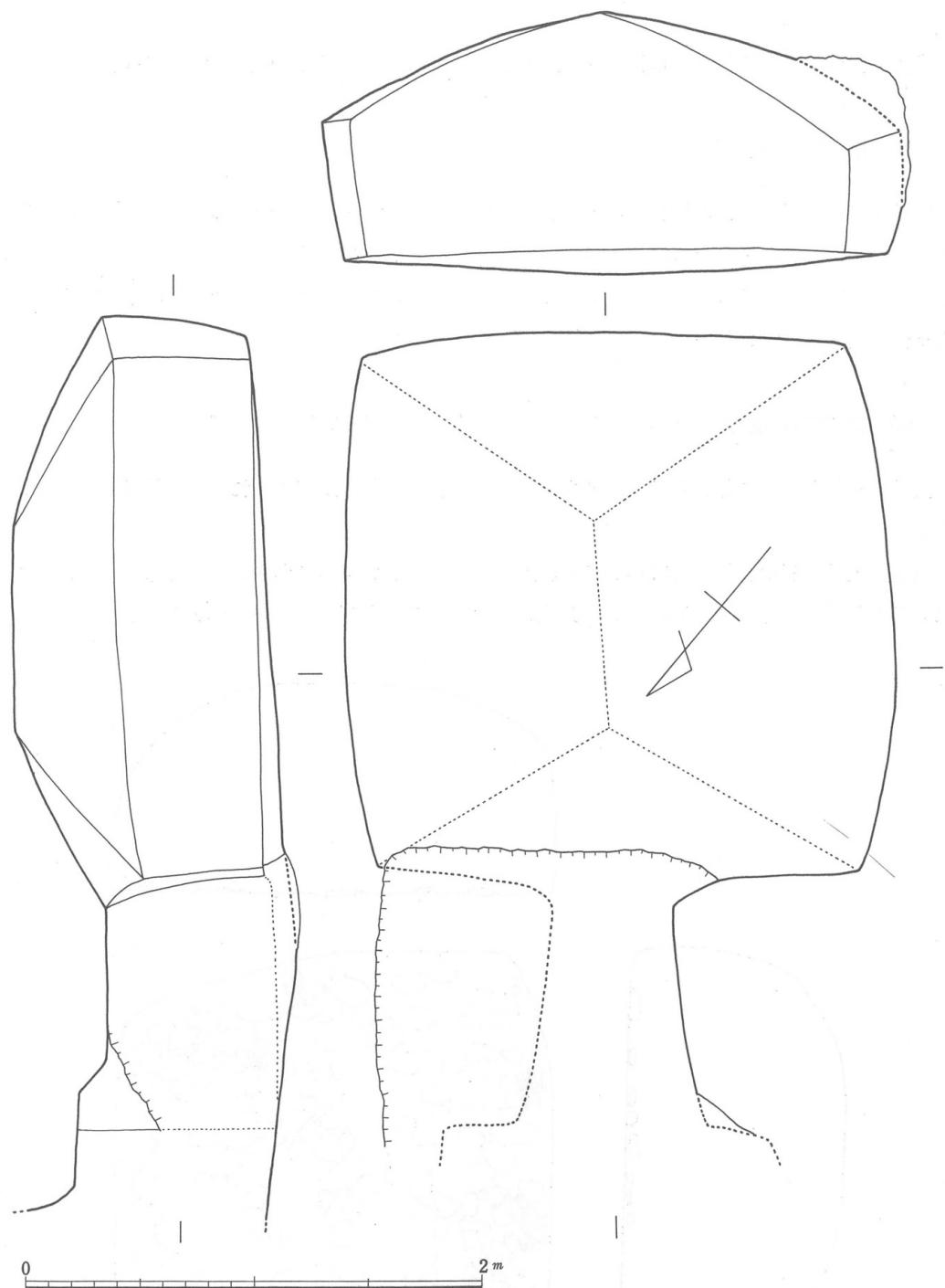
第21図 第14号横穴出土須恵器実測図

遺物は、玄室内部からは刀子および須恵器壊が発見されただけであったが、前庭部ではかなりまとまって土器が出土した。そのうち土師器はほとんどが小破片となって、器形をうかがうことができないが、須恵器には、壊・高壊・坦・横瓶・甕などがある。須恵器はⅢ形式後半～Ⅳ形式に属するもので6世紀後半の年代が与えられる。

(15) 第15号横穴 (図版第二五・第22図)

15号横穴は8号横穴の上位にあって床面の高さの差は約3.5mほどある。

横穴の構造は整美なつくりの妻入り家形の形態で、玄室は奥行、巾ともに2.4mを測る。天井の高



第22図 第15号横穴実測図

さは 1.1 m。主軸の方向は N40°W である。玄室内部はもと礫が敷かれていたとみられるが、すでに早くから盗掘を受けたらしく床面にはわずかの礫が残るだけで、左側の羨道部も大きく破壊されていた。

遺物は須恵器の壺の蓋とみられるものが1点発見された。Ⅲ期よりは降らないであろう。

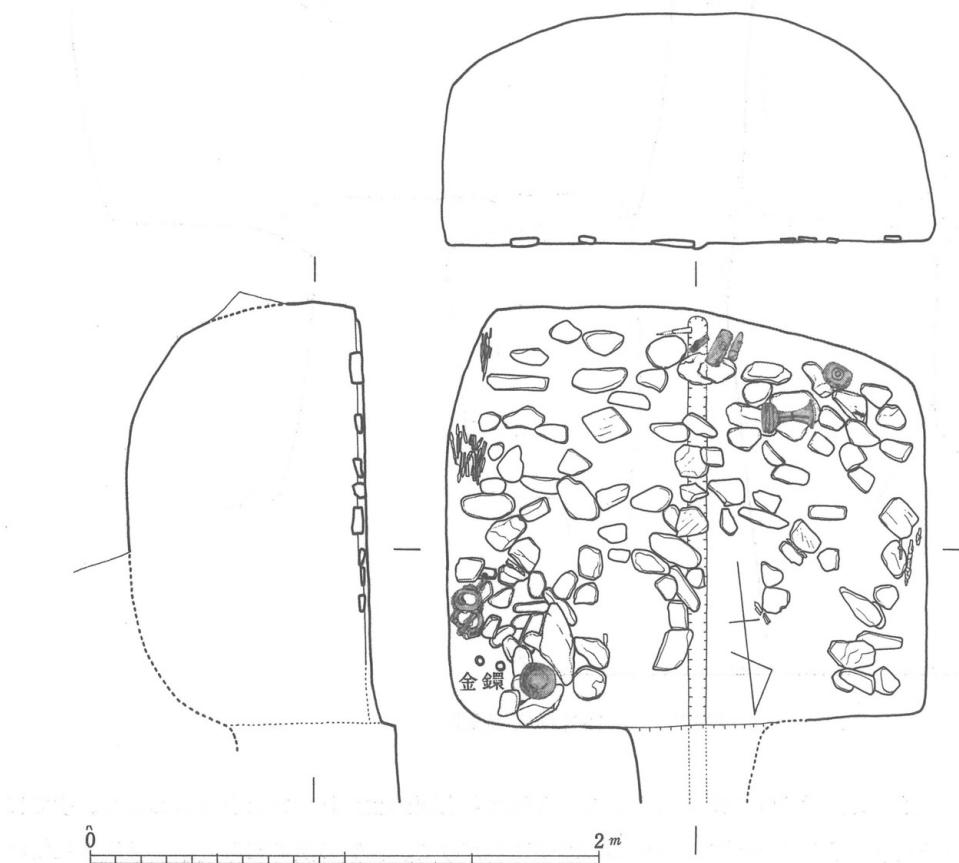
(16) 第16号横穴

15号横穴の東側下部に隣接して低置し、16号横穴を盗掘する際に15号横穴の羨道部左側を崩壊させている。玄室は奥行・巾ともに約2mあって隅丸の方形プランを呈するが、天井の高さは0.7mと著しく低い。床面および入口閉塞の状態は15号横穴同様明らかではない。遺物は区の部分に銅の責金の入った刀子片が発見された。

(17) 第17号横穴 (図版第二七、二八、六二、六三・第23、24、25図)

羨道の一部から前庭部にかけて破壊されたが、板石扉の存在が認められた。方位はN-6°-Eである。

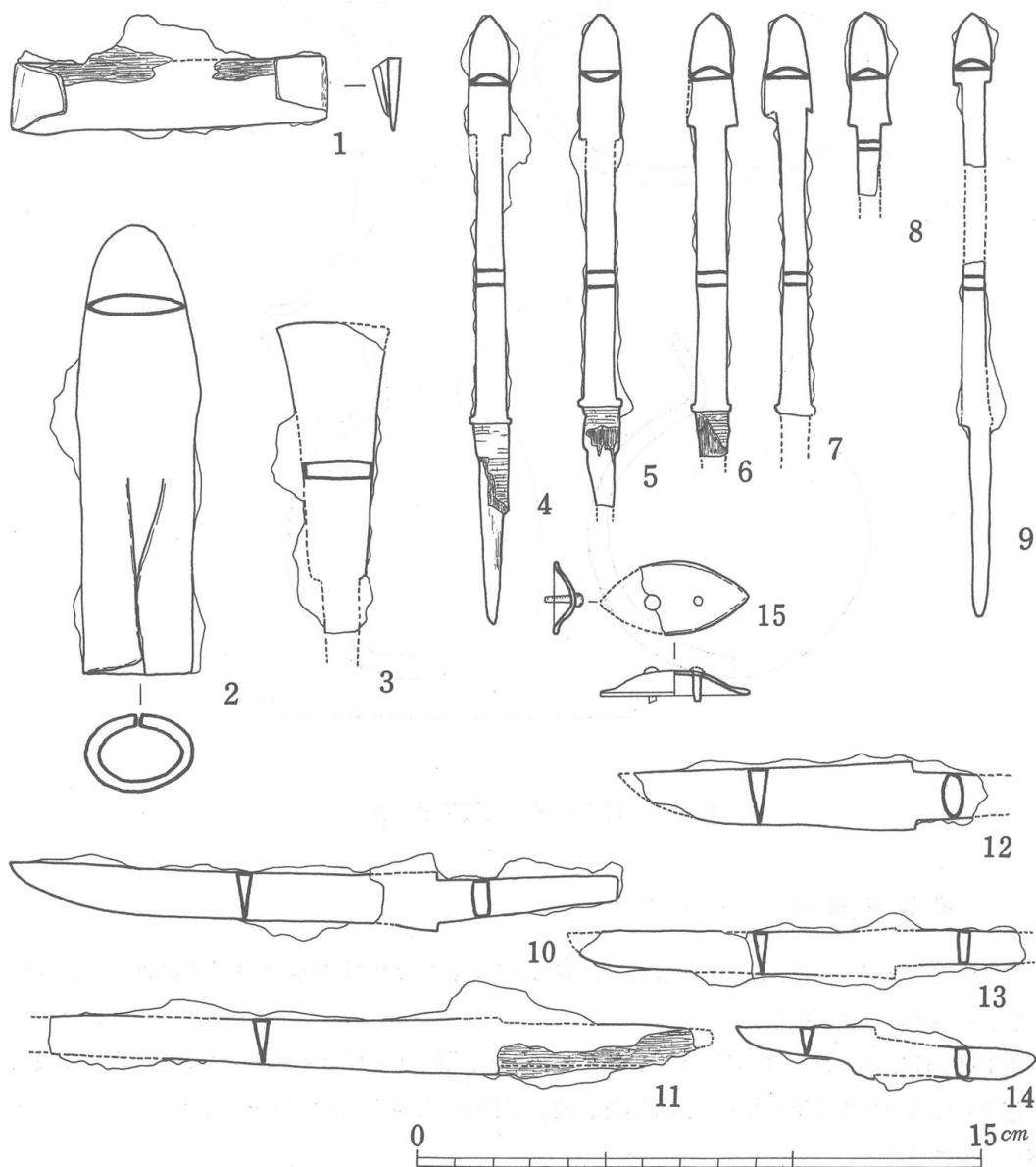
玄室は主軸1.64m、横巾1.87mを測り、飛山横穴群で最も規模の小さいものであるが、東壁と西壁に差があり西壁が東壁より30cm短い。天井は床面より90cmを測り、ドーム形をなす。



第23図 第17号横穴実測図

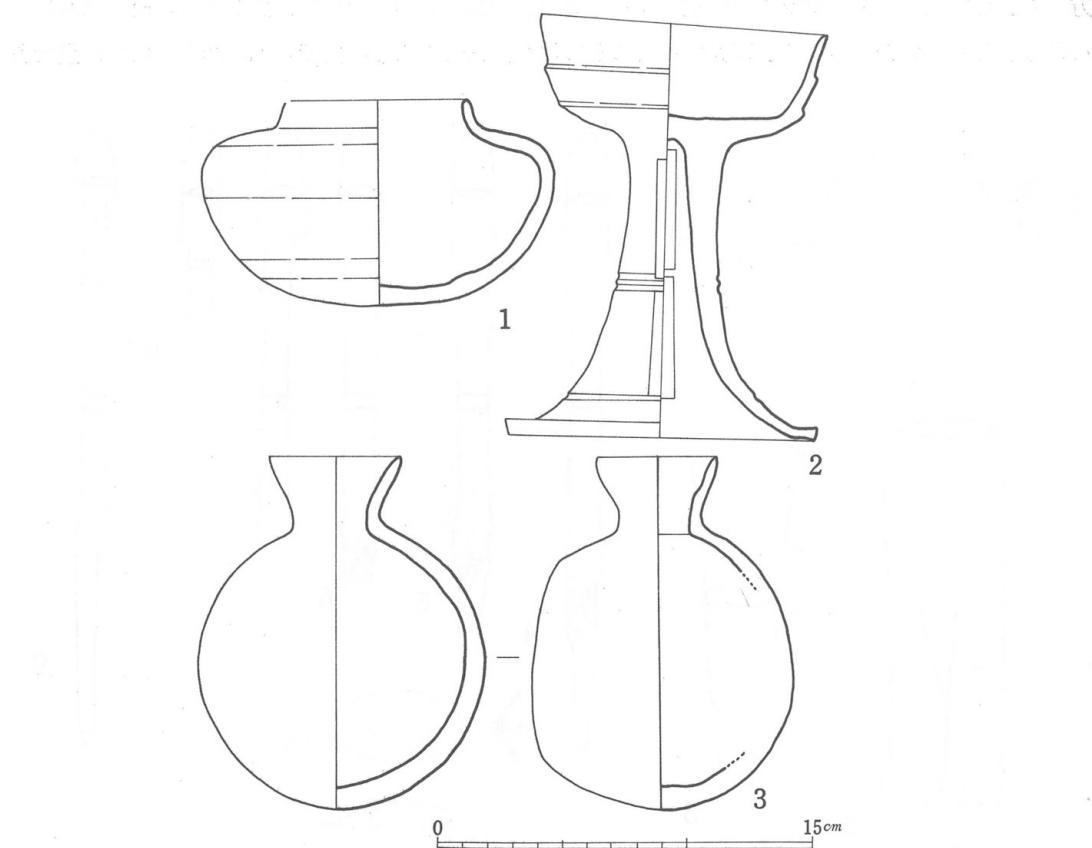
床面は礫石を疎に敷きつめているが、奥壁中央より羨道中央にかけて直線状の排水溝があり、特にその部分の上には意識的に礫石を配置したあとがうかがえる。排水溝の規模は、幅7～8cm、深さ3～4cm程度である。

遺物は東壁袖附近で轡、金環2、須恵器塙があり、中央部で鉄鎌がブロックで出土した。金環は双方とも、C字状の間隙にガラス玉が填込まれており、一段と装飾性を増した感がある。断面は八角形をなし、金張りの保存もよく、管見するところでは県内はもとより国内でも他に類をみない珍品であ



第24図 第17号横穴出土遺物実測図

る。また従来考えられていた耳輪使用法に対しても疑問が生じてくる。奥壁溝附近では鉢や斧、ひる鎌等の鉄製農具類が並んで出土し、西壁中央部で刀子が発見された。その他に高壺、提瓶、ガラス玉（黄色1を含む）が確認された。



第25図 第17号横穴出土須恵器実測図

(18) 第18号横穴 (図版第六〇)

17号横穴の東側にあり、床面もほぼ同高位置にある。羨門には厚さ18cmの板石を70度に傾斜させて置き、その周辺は栗石控積としている。

玄室は、両壁が大きく脹らみをもち太鼓形をなすが、西壁が東壁より30cmほど短い。従って奥壁は東側より西にむけて斜状となる。天井高は、羨道で45cmが推定され玄室は最高で90cmを測る。形式はドーム形に属する。

床面は砂利が敷かれ、奥壁より羨道に向かってやや傾斜を示す。

遺物は玄室中央部で刀子片1、黄色ガラス玉、前庭部で提瓶が検出された。

(19) 第19号横穴 (図版第二八~三〇、六四~六六、第26~30図)

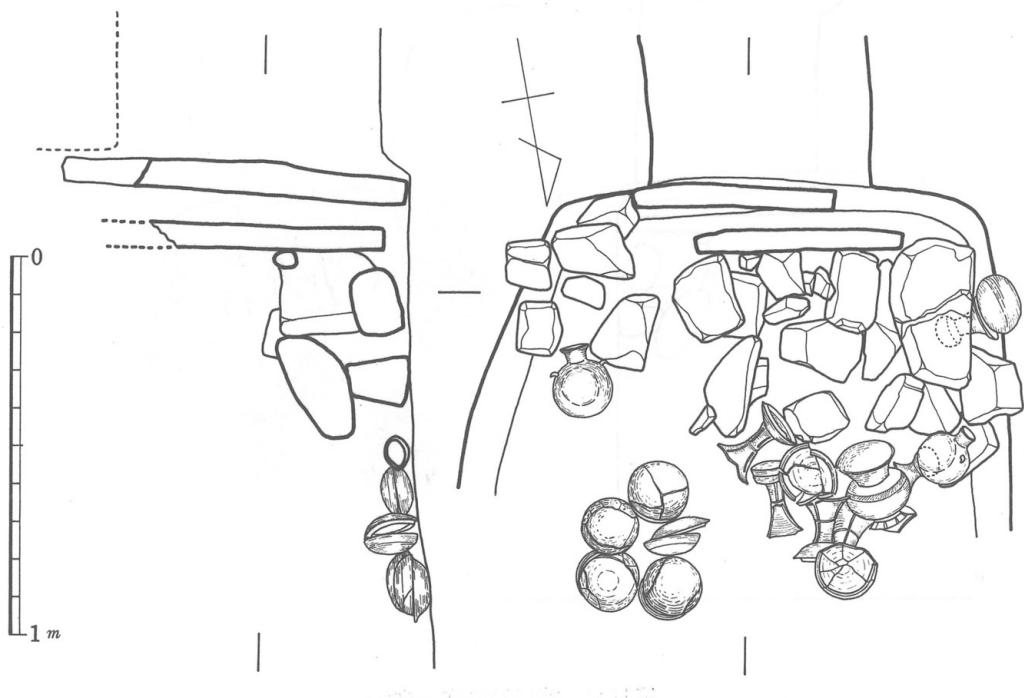
横穴群のはば中央に位置し、比較的残りのよい小規模な横穴でN-10°-Eの方位を示す。

玄室平面は、約2m四方の隅丸方形を呈するが、西壁が東壁より30cm短いプランである。

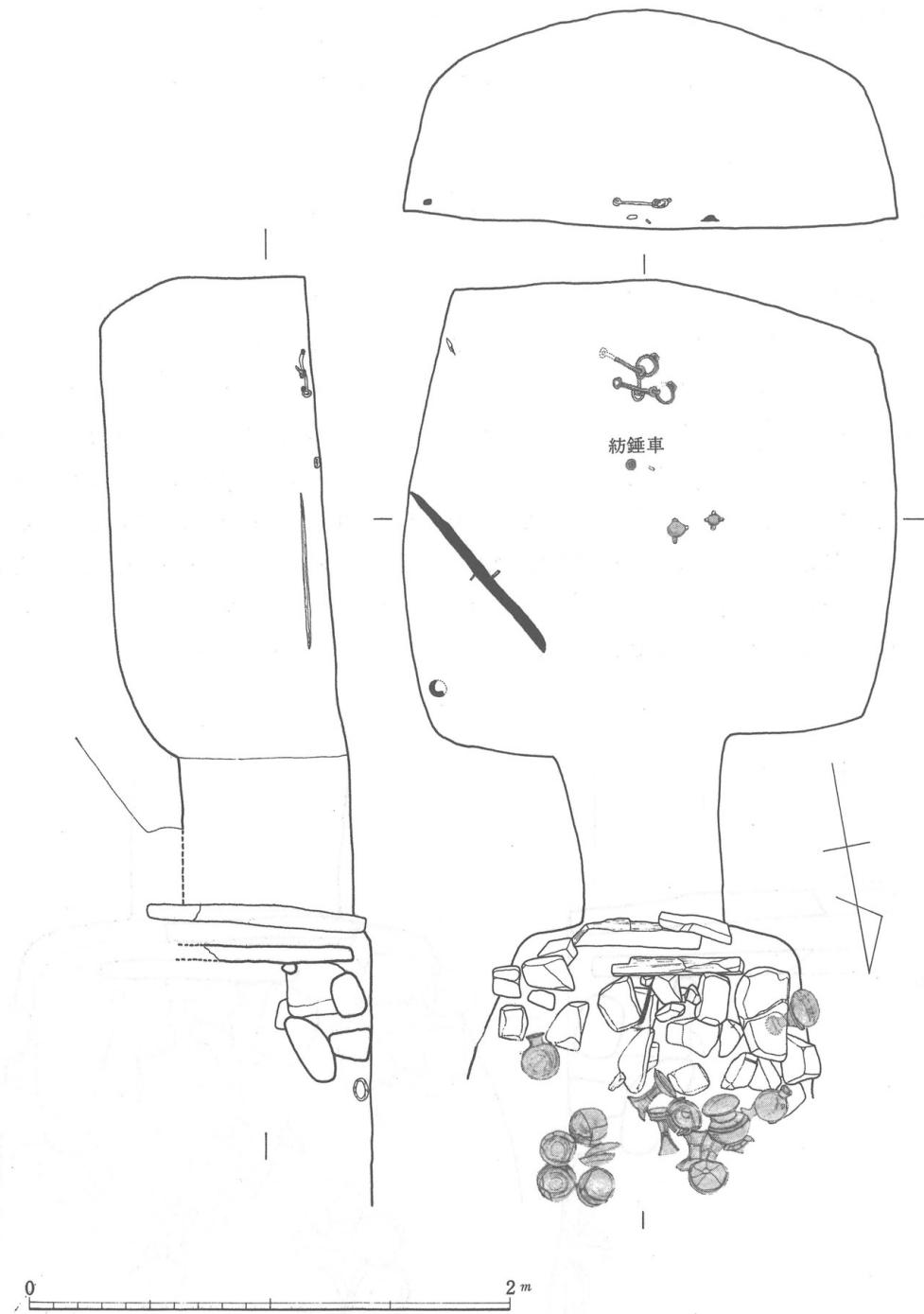
羨道は羨門附近で60cmの幅を有し、玄室に向かって若干の広がりをもつ。羨門には厚さ10cm程度の板石を二枚重ねにし、周囲を栗石控積みにて閉塞している。天井までの高さは玄室が90cm、羨道が70cmで蒲鉾形を呈している。

床面には礫石を用いていないが、奥壁より約7度の勾配を有し羨道となり、羨道は7cmの掘り込みにて前庭部となる。従って排水を考慮した構造とされよう。

遺物は、玄室内中央附近で轡・辻金具等の馬具、紡錘車、管玉があり、東壁より鉄鎌の附着した直刀、鐔などが発見された。前庭部はほぼ完全に露出し、多量の須恵器が確認され、埋葬後の祭器として使用されたものであろう。出土状態は大きく二ブロックに分けられ、中央部西よりは脚付壺を中心として有蓋、無蓋の高壺があり、東より五組の壺セット、それらのやや羨門よりは躰、提瓶などが確認された。須恵器は全て焼成、胎土共に良好である。須恵器の形式は、高壺にやや古式の形式をみることができるが、全体的にはⅢ形式の後半に属するものとされる。紡錘車の詳細は後述するが、側面および下面に陰刻を有する興味深いものである。



第26図 第19号横穴前庭部須恵器出土状態実測図

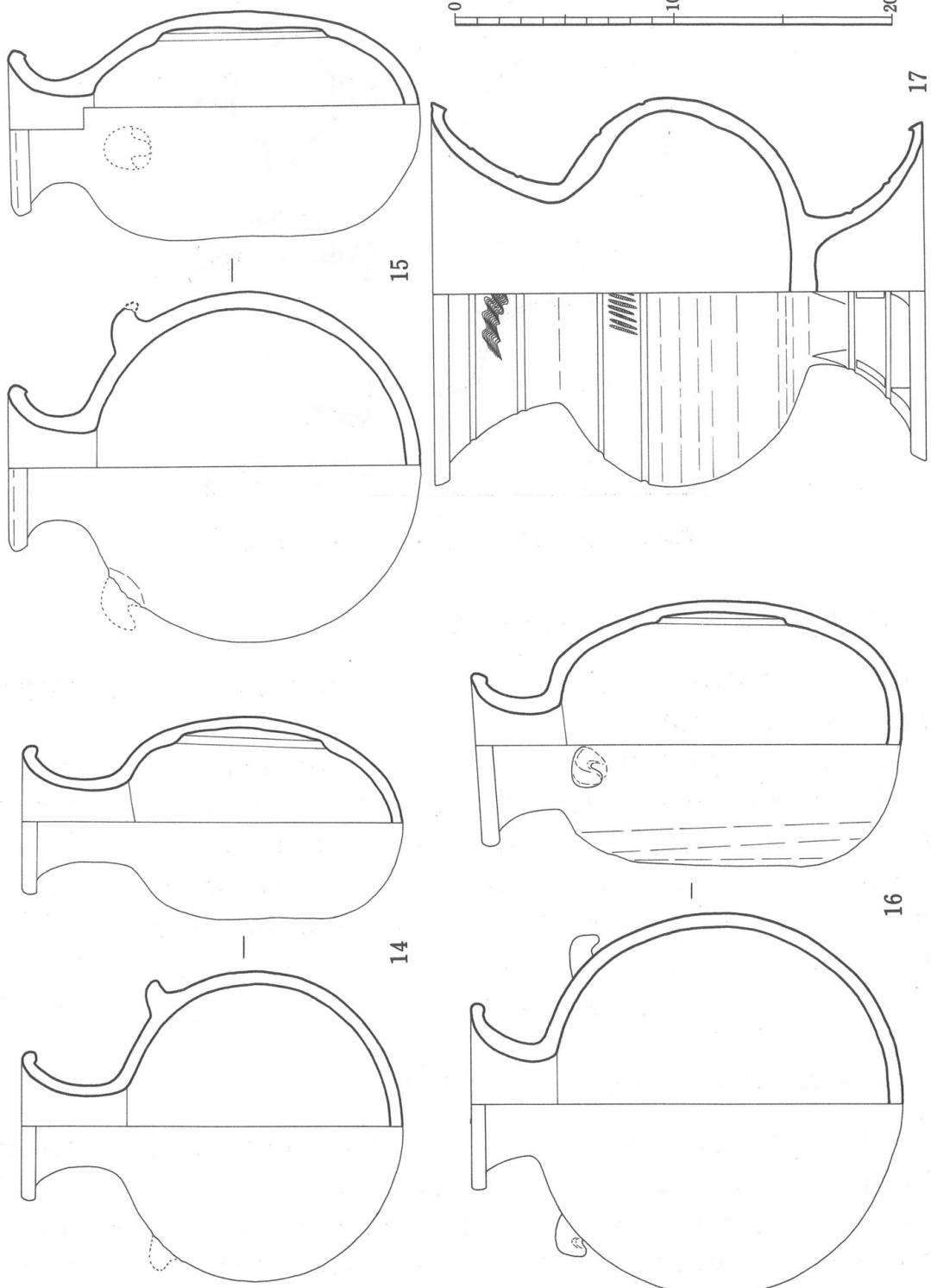


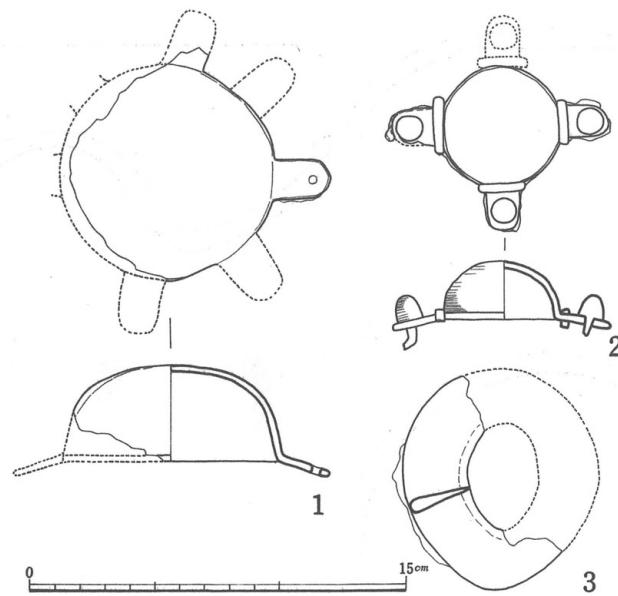
第27図 第19号横穴実測図



第28図 第19号横穴出土須恵器実測図 (一)

第29図 第19号横穴出土須恵器実測図(二)





第30図 第19号横穴出土雲珠・辻金具・鍔実測図

(20) 第20号横穴 (図版第三一、六七、六八)

西側群の最東部に位置し、全体的にもやや孤立している状態にある。羨門には板石扉、栗石控積が存在していたが調査前に破壊された。

玄室は2.2mのほぼ正方形を呈し、コーナーは隅丸をなすが、東側と西側とは壁の長さに差があり、西壁の方が30cmほど短い。玄室天井高は最高で95cmを測り、ドーム形をなす。床面は玉砂利が敷かれ、羨道部に向かって若干の傾斜を示すが排水的な面までは考えられない。

遺物は、直刀が奥壁より玄室中央部までに横に三振出土し、そのうちの二振は鍔がほぼ完全に残されている(図版第三一)。また西壁側で袖から長軸に平行して轡が並べられ、そのなかに鉄斧が発見された。その他に鉄鎌、刀子、東側袖附近で提瓶が確認された。

直刀等の出土状態からは、一応三体の埋葬が推定されよう。

(21) 第21号横穴 (図版第三二、三三、六九)

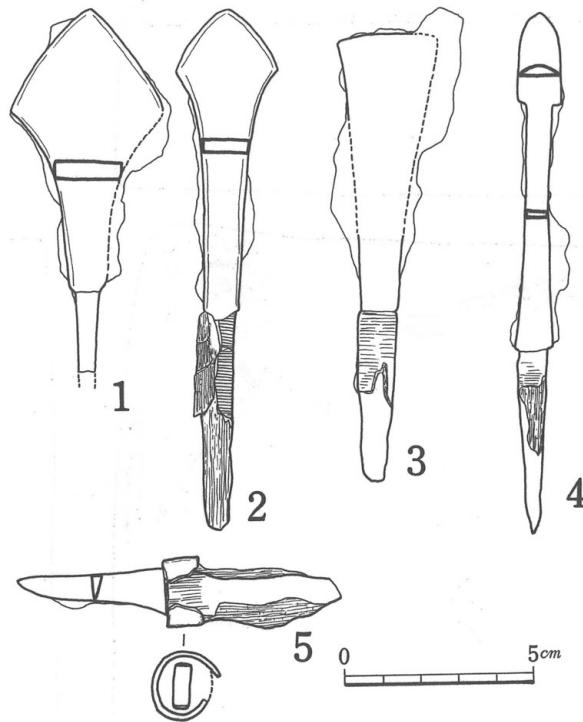
横穴群のなかで最も東側に位置し、玄室天井の一部が破壊されたが他は完存する。全長3mを測り、板石扉と栗石控積による閉塞状態が認められた(図版第三二)。

玄室は主軸2m、横幅2.15mの隅丸方形プランを呈するが、東壁中央部はコブ状の突出しがある。天井は床面より最高1mを有し、ドーム形をなす。羨道高は75cmで、最少幅42cmである。床面にはやや小形の礫石を敷きつめて床をなすが、排水等の施設は認められない(図版第三二)。

遺物は、中央部やや西よりに勾玉が4個集中し、瑪瑙製2、碧玉製2である。環類は金環2、銀環2が確認されたが、散乱した状態で出土した。その他には土製練玉、鉄鎌、提瓶、ガラス玉が発見された(図版第三三)。ガラス玉のうち1個は黄色である。

(22) 第22号横穴 (図版第三四、七〇、第31図)

西侧群の中央部に位置するが、玄室入口部から羨道にかけて破壊された。方位はN-18°-Eである。



第31図 第22号横穴出土鉄器実測図

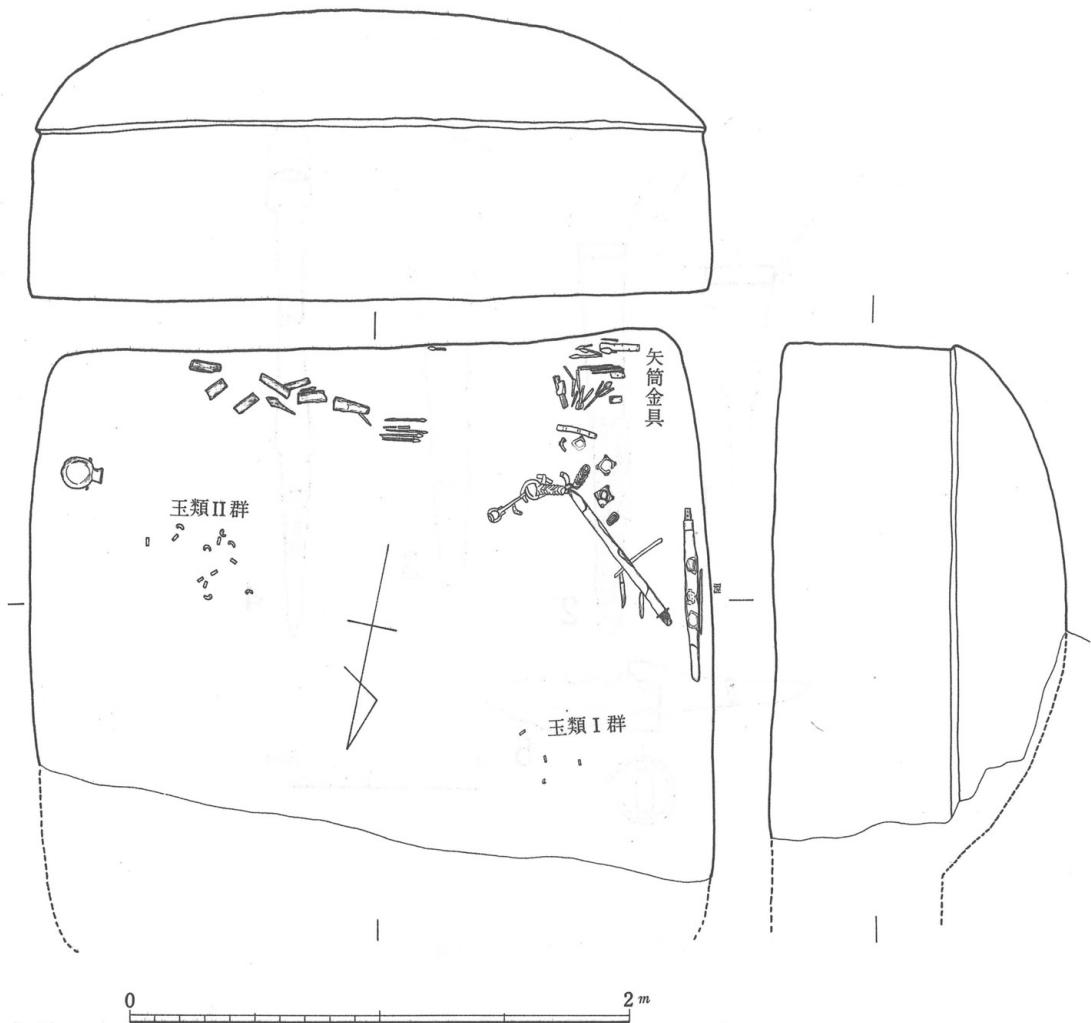
玄室は2mほどの正方形プランを呈し、19号横穴と同程度の小規模のものである。天井は最高で95cmのドーム形をなす。床面は小形の玉砂利が敷かれ、壁にそって幅5~8cm、深さ5cmほどの排水溝がまわり、奥壁中央より羨道に向けては若干幅を広くしている(図版第三四)。

遺物は、東壁よりで切先を奥壁に向けた直刀、鉄鎌、西壁附近で鉄鎌、刀子(第三一図)、ガラス玉が、西袖附近で管玉、土製練玉、須恵器蓋(図版第三四図)があり、奥壁近くでは朱塊が若干確認された。

㉓ 第23号横穴 (図版三五~三七、七一~七三・第32、33図)

東側群に属し、玄室の3分の2を残す程度であるが、横穴群の中で最も広い横幅を有し2.73mを測る。

天井は床面より70cmの点で鴨居をもち、ゆるやかな曲線で天井を結ぶ、床面には玉砂利が敷かれ、羨道部にむけて若干の傾斜を示す (図版第三五、第32図)。

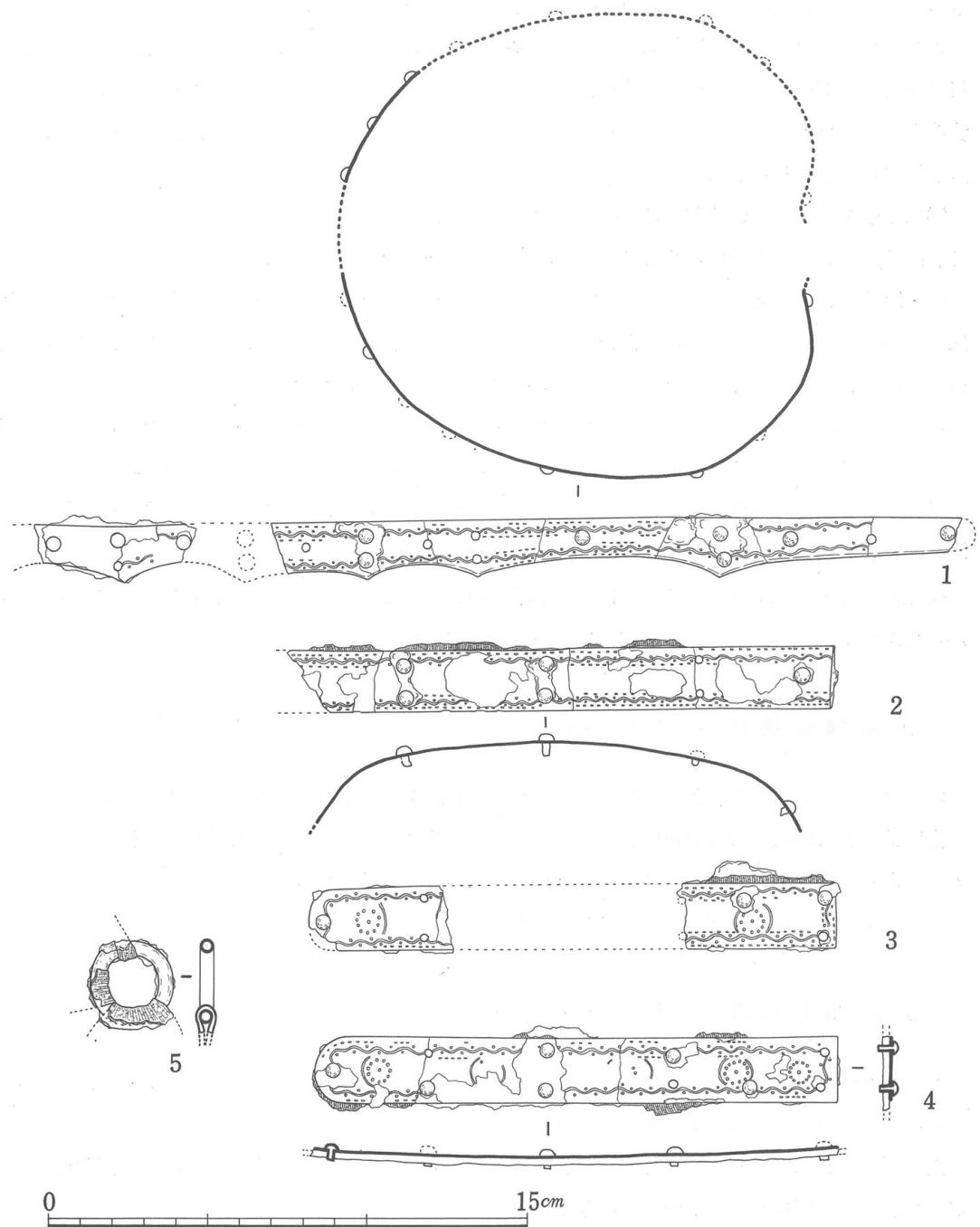


第32図 第23号横穴実測図

遺物は鉄刀が西壁近くで二振、東側奥壁近くで一振が10~15cmのバラバラの状態で発見された。また西側奥から壁にそって矢筒金具、鉄鎌、刀子、轡、辻金具、尾錠が集中して確認された (図版第三六)。玉類は東壁と西壁よりの二グループに分かれ、東壁よりで6個の瑪瑙製勾玉と7個の碧玉製管玉があ

り、西壁よりでは滑石製勾玉 1 と碧玉製管玉 3 が発見され、その他にガラス玉 23 個が確認された（図版第三七）。また東側奥壁よりで提瓶 1 がある（図版第三六）。

埋葬は玉類の出土状態から、二体以上が推定されよう。



第33図 第23号横穴出土矢筒金具実測図

次に出土した矢筒金具について若干ふれてみよう(第33図)。矢筒金具は4つの部分とこれに付属するとみられる小鉄環とからなる。金具は鉄地金銅張りのつくりのよいもので、裏面には布および革が付着して遺存している。一部に漆を思わせる皮膜もみられるが明らかではない。したがって、矢筒の本体は革で作られこれを布でおおって外側に金具をつけたものと考えられる。

さて、金具(1)は矢筒の口縁部について筒口を広げ形を保つものでは円形に復原される。径は約14.5cmある。下端に山形の割り込みがあって、鉢も多く他の金具とは著しく異なっている。共通した装飾として金具を縁どって波文がめぐりその谷部に1点が配される。また部分的に波文の上下に小列点が観察されるところがある。

(2)は左端を欠失しているが、ほぼ全形は知りうる。出土位置からして(1)のすぐ下部に位置する金具で、両端が同じカーブで曲げられている。現存長15.5cm、巾2cmを測る。

(3)・(4)はほとんど同様のつくりで、完形になる(4)でみると全長は16.5cmあって中央部がやや内側に反っている。また表面の文様は列点を配した波状文のほかに、列点で表現した円文5個が刻まれて、円文にはそれぞれ中心点をもっている。円文のいくつかは周囲に沈線の囲いのあるものがある。

出土位置は(4)が奥壁隅にあって、(1)が玄室中央部に向っていた。また(3)・(4)のあたりに鏃が集中して出土したことからみて、この矢筒は鏃を下向きにして納める形式のものであったことが知られる。

出土位置が原位置を保つものとするならば、矢筒の全長は約80cmほどであって各金具間の長さは、(1)～(2)間が37cm、(2)～(3)間が18cm、(3)～(4)間が23cmである。

鉄環の大きさは2.6cmあって周囲に二本の革帶の付着した部分がある。布がその上をおおっているかどうかは不明である。矢筒の懸垂に用いられたものであろう。

④ 第24号横穴 (図版第七三)

第一群の西側に位置し、羨道部のほとんどが破壊されている。方位はN-8°-Wである。

玄室は主軸2.5m、横幅2.4mのほぼ正方形プランを呈する。天井は最高1.52mと比較的高く、ドーム形である。床面には礫は敷かれていらないが、東側袖近くで三個の礫石が認められる。

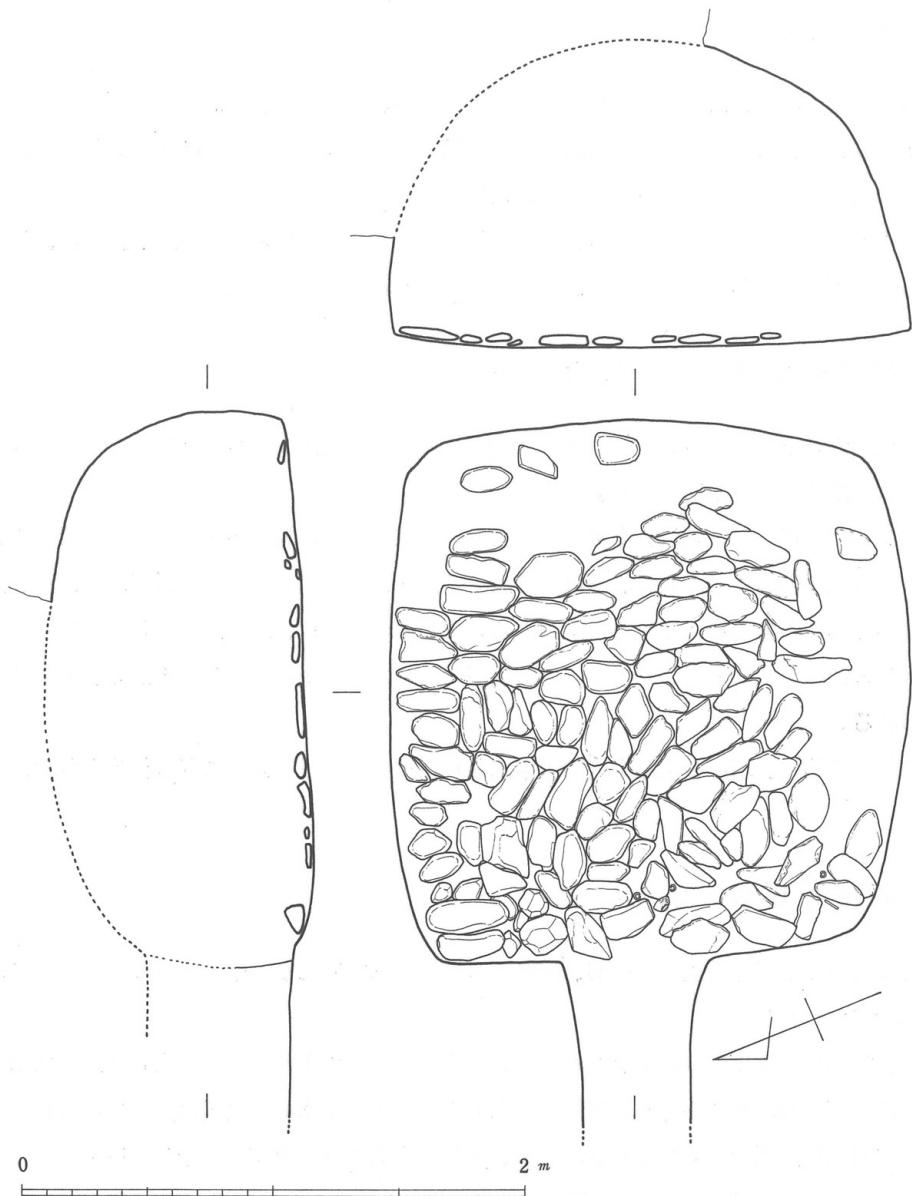
遺物は銀環1、ガラス玉1が発見されたのみである。

⑤ 第25号横穴 (図版第三八・七四・第34図)

西側グループのなかで、15号横穴の下に位置する。羨道は65cmの長さを残す程度であるが、玄室床面敷石状態から二次にわたる埋葬が確認された。

玄室平面は、西壁で胴張りを呈するが、2.10mの隅丸の正方形プランをなしている。天井は完存しないが、最高1.05mを測りドーム形をなす。

一次の埋葬にては、頁岩の扁平石を敷きつめ、特に東側は壁にそって列状に配置しており、一際目立つものである(図版第三八、第34図)。二次埋葬では、その上に雑然とした形で蛇紋岩を敷きつめて床



第34図 第25号横穴実測図（敷石は第1次床）

としている。

遺物は耳輪、辻金具、刀子、鉄鎌が一次で、須恵器蓋は二次埋葬時のものと推定される。

このように床面において、明確に再利用が認められるのは、本横穴群では第13号横穴と二基のみである。しかし25号横穴の二次埋葬は、第13号横穴のような大きな時代差ではなく、六世紀終末ごろに行なわれたものとみられる。

(26) 第 26 号 横 穴

横穴群の西側にあり、羨道部の大部分を破壊されたが、西に開口する。

玄室平面は、主軸 $2.4m$ 、横幅 $2m$ の隅丸方形を呈する。天井は最高で $1.05m$ を測り蒲鉾形を示す。

床面に礫石はなく、排水的な施設も認められない。

遺物は玄室内にては発見されなかつたが図版第七七の表採として載せた磧は、工事中に第26号横穴の羨道部附近より落下したものであり、この横穴にともなうものと考えられる。

(27) 第 27 号 横 穴 (図版第三九、七五)

第26号横穴の真下に位置し、方位は N— 68° —W である。羨門部から玄室奥壁東側にかけて破壊されたために、閉塞状態は不明である。

玄室は $2.4m$ の正方形を呈し、 $1m$ ほどの羨道が推定される。天井部も大部分が欠損しているが、床面より $1m$ 程度の高さとみられ、蒲鉾形を呈する。床面は礫床であるが非常に雑であり、奥壁附近は礫がはがされて中央部によせ集めた感がある。その礫の間には、鉄鏃が散乱した状態で出土しており、また $25 \times 70cm$ の扉に使用したとみられる板石が玄室内に敷かれていることから、追葬の可能性がうかがわれる。

遺物は鉄鏃の他に、細身の金環 1 (図版第三九) 銀環 2、刀子、ガラス玉が検出された。

(28) 第 28 号 横 穴 (図版第七五)

羨道部に近い玄室天井と羨道の一部、前庭部が破壊されていたが、厚さ $5 \sim 6cm$ の板石を二重にした扉石が確認された。

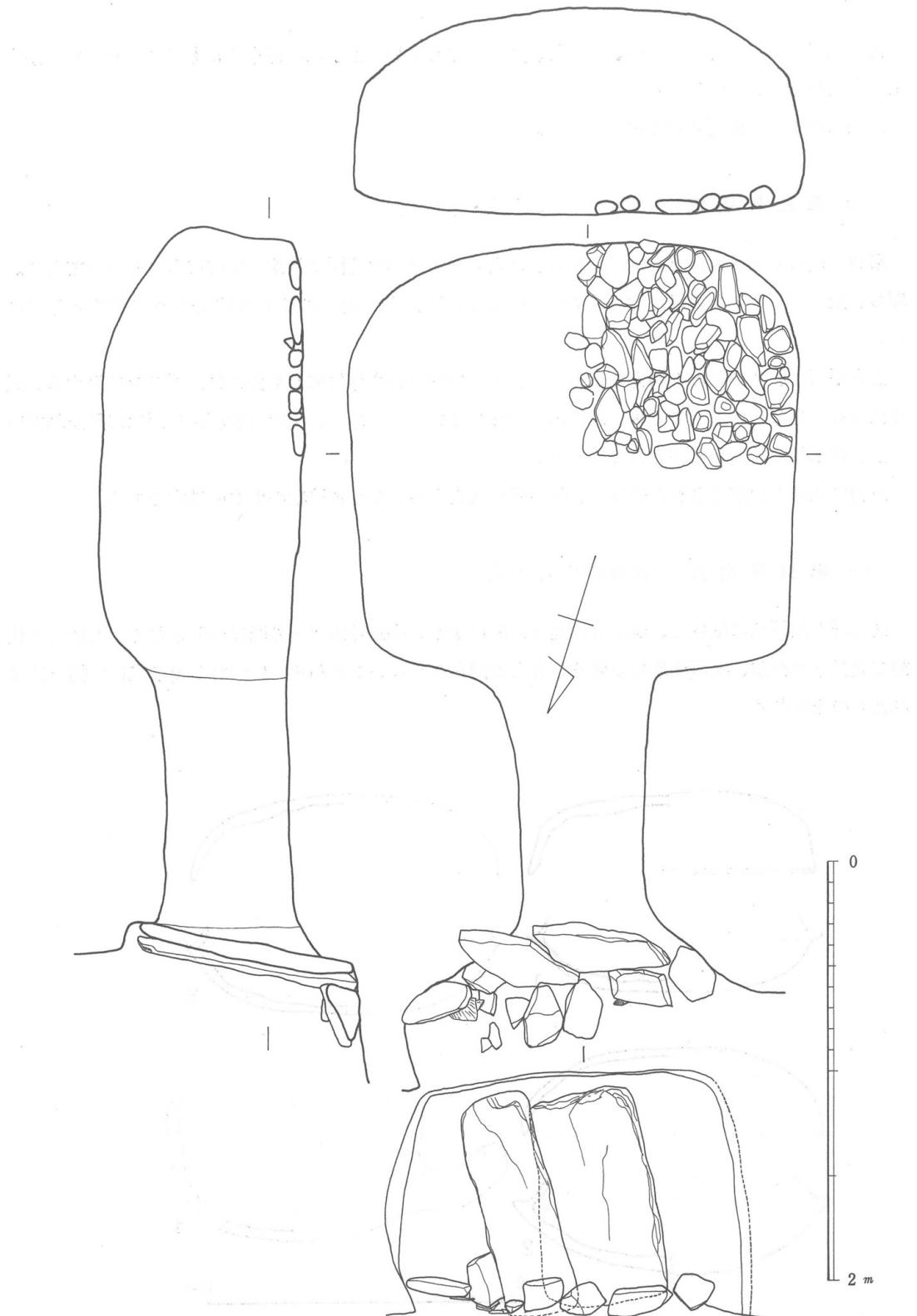
玄室は、 $2.2m$ のほぼ正方形プランをなす。天井は、玄室で $1m$ の高さを有し蒲鉾形である。床面には小形の礫石が敷かれているが、雑然としたものである。排水的な施設は認められない。

遺物は直刀二振が西壁近くで発見されたが、一振は小刀で柄が完存し、柄巻も明確である。その他は鉄鏃、刀子、銀環、メノウ製勾玉が確認された。

(29) 第 29 号 横 穴 (図版第四一、七六)

横穴群のほぼ中央にあり、孤立的な位置をしめる。

玄室平面は、主軸長 $2.4m$ 、横幅 $2.6m$ を測り、西壁が若干の胴張りを有する隅丸方形プランを呈する。羨道は $80cm$ の長さを有し、中央部がややせばまり巾 $60cm$ である。天井は玄室の最高が $1.3m$ 、羨道で $75cm$ を測り、ドーム形を呈する。床面には、羨道中央部まで礫石を敷いているものの、かなり空間が目立つ、しかしその空間には、幼児拳ほどの石を敷きつめている部分もみられる。また両側壁から中央にゆるやかな窪みをもち、奥壁から羨道に向かって約 5 度の傾斜を有している。



第35図 第30号横穴実測図

羨門は二枚の緑色片岩を並べ、栗石控積にて閉塞しているが、前庭部東壁にも壁にそって板石が立てられている（図版第四一）。

遺物は鉈1本が確認されたのみである。

(30) 第30号横穴（図版第四一、七六・第35図）

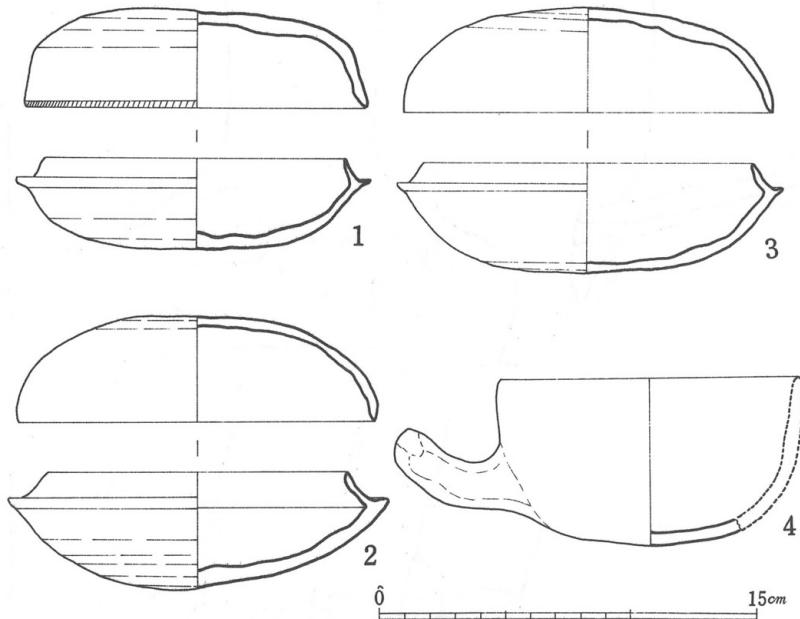
第29号横穴の東5mほどの位置にあり、ほとんど破壊がなく閉塞状態の明確にされるものである。即ち、羨門に高さ1mの緑色片岩を2枚並べて扉とし、その周りに栗石控積をもって閉塞としている。

玄室平面は、2mほどの隅丸な正方形で、羨道の細長い全体的に整備されたプランを呈する。天井は蒲鉾形をなし、玄室で1m、羨道にて60cmの低いものである。床面は礫石が全面的に敷かれているが、排水等の施設は確認されなかった。

遺物は鉈1が確認されたのみで、第29号横穴と同様に非常に遺物の少ない横穴である。

(31) 第31号横穴（図版第四〇、七六）

横穴群の最西端に位置し、羨道は西向きに開口する。第32号横穴との間には壁がなく、連結した状態で発見されたが、壁面崩壊の痕跡らしきものが存在しないことから、いづれかの横穴にて掘り込まれたものとされる。



第36図 第32号横穴出土土器実測図

玄室平面は、南側袖が北側より2倍の90cmを測り、南壁が奥壁に向かってしだいにせばまる不整形なプランを呈する。天井は第19号横穴に類似した蒲鉾形で、高さは最高で90cmである。床面には礫石が、中央部附近にのみ敷かれている。

遺物は残存状態の悪い銅釧、銀環、須恵器蓋、刀子、鉄鎌が確認された。

(32) 第32号横穴 (図版第七六・第36図)

第31号横穴の東側にあり、玄室東側三分の一と、羨道の全てが破壊された。

玄室は主軸長2.1m、横幅2.3mの隅丸方形の平面プランで、天井の形態は高さ1mの蒲鉾形が推定される。床面は第31号横穴より18cmほど高いが、敷石等の施設は認められない。

遺物は、玄室のほぼ中央附近にあり、焼成の良くない須恵器壺三組のセットと、やや奥壁より刃先を西に向けた刀子、東に向けた鉄鎌、西側袖附近では何度かにわたり火熱を受けた土師器取手付壺が検出された。

IV 総括

構造 (別付図)

横穴の構造は、前庭一羨道一玄室の基本的形態があるが、横穴自体が自由に掘ることのできるものであり、したがってそれらの形態を細部の相違にこだわっていたずらに細分化することは、かえって混乱を生じさせることになる。

飛山横穴群においては、特に地域性を示す形態のものはなく、大部分がごく一般的にみられる形態を呈していることから、小異をすべて機械的に家形、ドーム形、蒲鉾形の三形式に大別するにとどめた。

I 形態

(1) 家形

この形態をとるものは、第1号、第15号横穴の2基のみで、調査を行なった32基の横穴中特異な存在を示している。いずれも妻入りの構造であるが、1号横穴では1段高い棺床とこの部分を区画する障壁をそなえ、さらに天井部には棟を表現する造出しが設けられるなど特筆すべき構造をもつている。15号横穴も同様に妻入家形の構造で非常に整備された形態を示すが、1号横穴のような特殊な施設はない。

(2) ドーム形

天井がほぼ球形状をなしているものを称し、これはさらに側壁から天井部に移るあたりに段をもうけた、いわゆる鴨居の有無によって2種類に分けることができる。

鴨居を有する形態の横穴には、第4号横穴・第14号横穴・第23号横穴があり、天井は四壁からほぼ同じカーブをなして形づくられる。天井の高さは次に述べる鴨居をもたない構造のものに比較すると一般にやや低い。

これに対し第3号横穴・第24号横穴・第29号横穴などは鴨居をもたないドーム形天井の典型的な形態を示している。鴨居のある構造の横穴では天井の高さが約0.9~1.2mであるのに対し、もっとも天井の高い24号横穴では約1.5mを測る。天井は玄室中央よりやや奥壁寄りのあたりに最高所をつくっている。

(3) 蒲鉾形

縦断面において天井部が平坦になって、いわゆる蒲鉾形を呈するものである。比較的規模の小さい横穴に多い。第2号横穴・第5号横穴・第7号横穴・第19号横穴・第22号横穴などがこの形態の代表的なものである。天井の高さはおよそ1m前後で非常に低い。

一方、平面形でみると、玄室規模のもっとも大きなものでも第1号横穴(縦長プラン)の場合で奥行2.85m・巾2.25m、第29号横穴(方形プラン)の場合で奥行2.50m×巾2.60mである。また最小の規模のものとして17号横穴の奥行1.64m・巾1.87mをあげることができる。したがって、大きさの上

ではほぼ成人1体を奥壁と平行に又は直角に伸展することのできる約2m前後の長さが基本となっており、各地にみられる通常の横穴ととくに変わるものではない。

平面形は、1号横穴が顕著な縦長プランをとるほかは、大部分が方形かやや縦長の形態に造られ、横長プランのものはない。

II 床

密閉されていた横穴では、調査時に大量の地下水がたまっていたものがあった。地層の関係から地下水の流入は避けることができなかつたとみられ、種々の床面施設が工夫されている。ここでは床面に切られた排水用の溝とは区別して敷石についてみてゆきたい。

まず、敷石のないものも含めて敷石に使用された材料によって分類してみると次の4種類に分かれ。

(1) 大豆粒ほどの大きさの玉砂利を敷いたもの………(1号・2号・10号・18号・19号・20号・22号・23号)

(2) 磯を敷いたもので、使用された磯は結晶片岩の扁平円磯と角ばつた大形の蛇紋岩磯との2種に明確に分かれる。前者を使用した横穴は、4号横穴と25号横穴の第1次床のみであつてその外に並用した例がない。このことから、敷き並べた際に凸凹が多くて一見不適当にみえる磯石の方がこのような条件の場合には都合がよかつたことがうかがえる。……(3~8号・11号・13号一次床・17号・21号)

(3) 磯と板石を並用したもの。横穴の築造当初から並用したとみられる横穴は14号横穴のみで、後に横穴を再利用した際に石棺材とみられる大形の緑泥片岩板石を持ち込んで二次床を造った13号横穴も便宜的にこの類に入れるとすれば2基となる。

(4) 敷石をしないもの………(24号)

使用材料と敷石の有無によって以上の4類に分けられるほか、さらに敷石の状態から

(A) 全面に敷石したもの

(B) 床面の一部に限って敷石したもの

の2種に分かれる。ほとんどの横穴が(A)に属し、(B)は8号および31号横穴の2基である。敷石した位置は玄室中央部で、釧・耳輪などの副葬品が発見された31号横穴の場合、それらの遺物は敷石の外側にあつたことから、敷石の部位が必ずしも屍体の安置場所であったと断定することはできない。

敷石を行う前の床面の造成については、前述したように1号横穴が区画された一段高い屍床をもつほか、13号横穴でも奥壁側が一段高くつくられている。また7号横穴では奥壁に向つて右側の部分に排水溝が集まつていて、ここに棺(または屍体をのせた板)などが置かれた状態を推測させる。

III 排水溝

11基の横穴にて確認された。その掘り込みは大部分が羨道中央を通つて前庭部に排水されるが、五形式に分類される。

1) 周壁にはなく、奥壁中央より直線状に1本が走るのみで最も簡単なものである。第10号・15号

・17号横穴が属する。

2) 第13号横穴にみられる形式で、周壁にはないが十字形に掘り込まれている。

3) 壁沿いを一周して排水される形式で、第1号、11号横穴がこれに属するが、第11号横穴は羨道の両壁を通って排水されるのに対し、第1号横穴は一周した溝が羨道中央を通つて排水される。

4) 壁沿いを一周し、さらに奥壁中央から羨道にむけて排水される形式で、第3号・4号・5号・8号・22号横穴が属するが、第5号・8号・22号横穴は第11号横穴の形式に奥壁中央からの溝が加えられたものである。従つて羨道では3本の溝によって排水される。第3号・4号横穴は、第1号横穴の形式に奥壁からの溝が加えられるものである。従つて羨道は1本の溝にて排水されるが、第4号横穴の中央溝は奥壁にまで達していない。

5) 第7号横穴にみられる形式で、何本もの深い溝が側壁から中央に向い、さらに玄室入口部附近から1本の溝で排水される。

IV 門 塞

前庭部の大部分が破壊されたために、全体的な内容を知ることはできないが、そのほとんどは緑色片岩を板石扉とし、その周囲を蛇紋岩栗石にて控積みとしている。第7号・19号・28号横穴は扉石を二重にしているが、第29号・30号横穴では二枚を横に並べた状態にしている。特に第7号横穴は、二重の板石扉で丁寧にふさがれている。すなわち二枚目の扉の周りにのみ栗石控積をし、さらに扉石を設置している状態である。また第29号横穴は、前庭部東壁にも板石を立てており（図版第四一）、口状にあったものかどうかは不明であるが、特異なものであった。

以上、飛山横穴群の構造上の特徴を大まかにみてきたが、出土した遺物で知る限りではほとんどの横穴が6世紀後半の時期に埋葬を行なつて、構造上の特徴はとくに時期差を示すものではない。ただし、床面の敷石には時期的な流れをうかがうことができる。

すなわち、玉砂利敷き・扁平円礫敷き→蛇紋岩角礫敷き→板石持込みという順序が考えられる。

一方、構造と副葬品との関連をみると、家形および鴨居のあるドーム形構造の横穴に豊富な副葬品が発見されたことから、横穴構造とその被葬者の間には一応の相関関係が考えられる。とくに、1号横穴のような特殊の構造を有する横穴の被葬者については考慮るべきであろう。

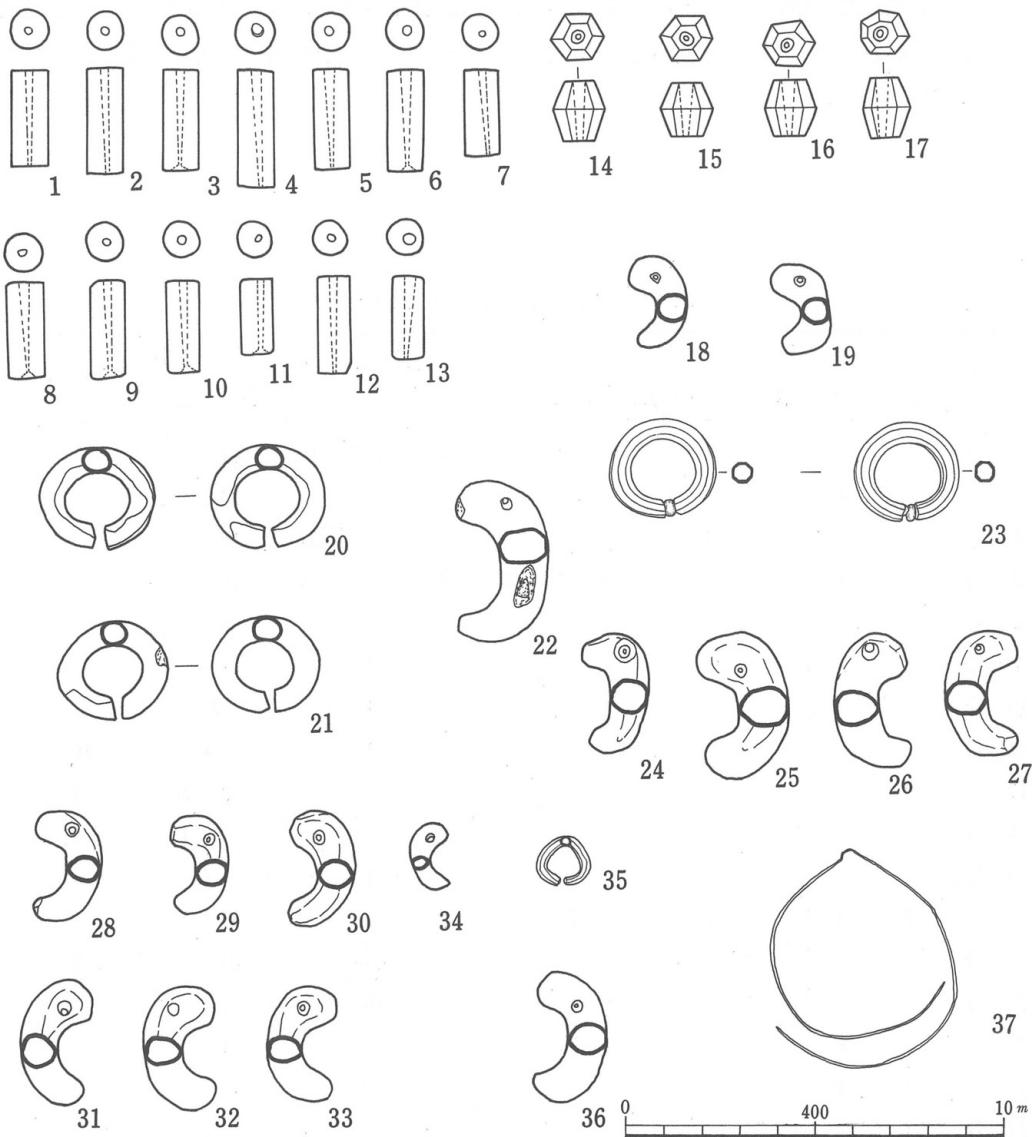
遺 物

横穴古墳の調査はこれまでにも数多くなされ、そのなかには副葬品の内容の知られたものも少くない。横穴古墳というと一般には構造的変化に乏しく、副葬品の貧弱な古墳として認識されがちであった。しかし今回調査された飛山横穴群から発見された遺物は、他地域の後期古墳と比較してもなんら遜色のないばかりでなく、いわゆる終末期の群集墳と呼ばれるものの内容よりはやや優秀な副葬遺物を含んでいることが注意される。

次に出土遺物について項目ごとにみてゆこう。

(1) 装身具（第37図）

メノウ製勾玉・耳輪・ガラス玉などは後期古墳の遺物としてきわめて一般的なもので飛山横穴群でも例外ではない。なかでも耳輪は13号横穴の9個をはじめとして、2対以上発見されたものもいくつある。これをそのまま埋葬された遺体数とみるとやや無理があるにしても、これらの横穴では他の出土遺物からして少くとも1回以上の追葬が行なわれていることは確実である。



1~19…1号横穴、20・21…2号横穴、22…4号横穴、23…17号横穴、24~27…21号横穴、
28~34…23号横穴、35…27号横穴、36…28号横穴、37…31号横穴

第37図 飛山横穴群出土装身具実測図

17号横穴から出土したガラス小玉挿入の金環は貴重な発見であった。大きさは通有のものと変りないが、断面が八角形を呈しきわめて保存状態がよい。また27号横穴では、小形細身の金環が発見された。この種の細身金無垢環は一般に六世紀中ごろで姿を消す遺物である。

玉類では、1号横穴から検出されたメノウおよび水晶製の勾玉に切子玉・碧玉製管玉を連ねた一連の玉飾りは見事である。玉類で注意すべきは、赤や黄の色つき小玉それに土製練玉の出土があげられよう。土製練玉は22号横穴で管玉がある外はいずれも丸玉であるが、土製練玉を有する横穴がとくに時期的に新しいわけではない。17号・22号横穴などの例でみると須恵器Ⅲ期後半の時期にはすでにその出現が認められる。

飛山横穴群出土装身具一覧

横 穴	耳 輪			勾 玉				切子玉	管玉	ガラス玉		色小玉		土製玉	鉤
	金	銀	不明	メノウ	水晶	碧玉	不明			大形	小形	黄	赤		
1 号				1	1			4	13	19	81				
2 号		4									10	1	1		
4 号				1						21	15				
5 号	1							1	6	4	118				
6 号											5				
7 号	3	2		2						1		1			
10 号										1		3			
13 号		9								1				26	
17 号	2										2	3			3
18 号												1			
19 号										1					
21 号	2	2		2		2					35	1		7	
22 号										3	(土製)	84		1	2
23 号				6				1		10		9			
24 号		1										1			
25 号	1	4										14			2
27 号	1	2									6				
28 号		1													
30 号			1												
31 号		3	1												1

この外、装身具としては、31号横穴から発見された鉤がある。巾5mmの薄い銅板を環状にまげたもので、両端を重ねて環の大きさを自由に調節できるようにしている。

なお、勾玉のうち5号横穴および23号横穴出土の勾玉は、同質のものであるが材質がはつきりしない。風化して白色になったとみられ表面は手で触れても白い色がつくほどもろい。頭から尾の方向に縦状に節理がある。

(2) 武器

鉄刀

1号・2号・3号・5号・10号・13号・19号・22号・28号の各横穴からそれぞれ1振が出土し、4号・20号・23号横穴では各3振が発見された。各横穴における出土の位置は必ずしも一定していない。壁寄りに置かれたものが多いが、3号横穴のように中央部に置かれたものや、20号横穴のように3振がほぼ同じ間隔で並べられて、あたかも3遺体が並置されそのそばに置かれたかのような状態が考えられるものもあった。

各横穴から出土した鉄刀は、地下水による錆化が著しく、大部分が原形をとどめない状態であった。長さはまちまちであるが、1号横穴出土の鉄刀がもっとも長く全長110cmほどある。刀装具の遺存するものでは、2号・23号・28号横穴出土の鉄刀に喰出し鍔がつく。また、倒卵形の大形鍔の付属する鉄刀は5号横穴の1振りと、20号横穴出土の3振りのうちの2振りがある。5号横穴のものは、8つの方形透しがあけられている。このほか13号横穴で鉗・鎧金具・鍔の断片が、19号横穴で同じく鍔の断片が発見されている。

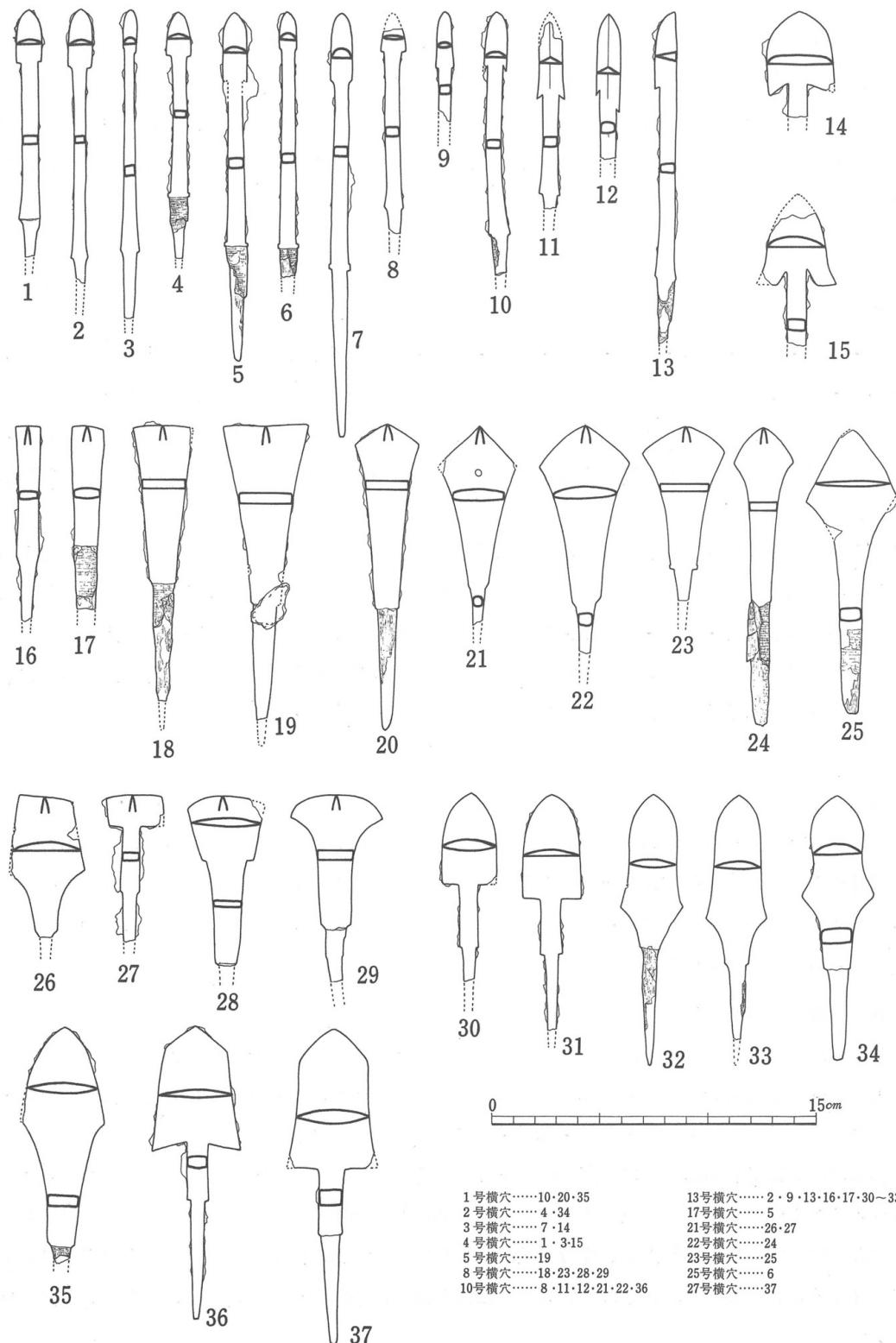
刀子

大半の横穴から発見されており、数も多い。大部分が全長10~15cmの長さのものであるが1号・13号・17号横穴などには全長20cm前後のものがある。1号横穴出土の1つは茎端に目釘を有している。全体に刃部分において茎の巾より刃部巾が急に細くなる形態のものが目立つが、これは長期間の使用による研ぎ減りを示すものと考えられる。

鉄鎌 (第38図)

刀子や須恵器などとともに、ほとんどの横穴から発見されている。出土した鉄鎌の総数は、先端などによって確認したものだけでも350余本を数え、横穴1基についてみれば、13号横穴において96本が確認されたほか、4号・10号・20号・23号・27号横穴などで30本前後の鉄鎌がみとめられた。

これらの鉄鎌は形態的にみれば、実用的な鑿箭式、片刃箭式の鎌が圧倒的に多数を占めていることは言うまでもないが、広鋒の鎌をも含めてその形態的な種類の豊富さは驚くばかりである。出土した鉄鎌の形式はまず大きく、鑿箭式、片刃箭式、三角形式、斧箭式、柳葉式、定角式、五角形式の7形式に分類することができる。さらにこれらは、断面形および細部の形態の違いから次表のように分けられよう。



第38図 飛穴群出土鐵鏃集成図

形	式	集成図ナンバー	備考
(A) 鑿箭式	片丸造	I 片丸造 鑿箭式	1~3 箆被に長短あり 鋒に大小あり
		II 棘箆被片丸造鑿箭式	4~7 箆被に長短あり
		III 片丸造腸抉鑿箭式	10
	両丸造	IV 両丸造 鑿箭式	8~9
	鑄造	V 鑄造腸抉鑿箭式	11~12
(B) 片刃箭式	腸抉片刃箭式	13	
(C) 三角形式	片丸造	I 広鋒片丸造三角形式	30
		II 広鋒片丸造腸抉三角形式	14~15
	両丸造	III 広鋒両丸造三角形式	31
(D) 斧箭式	方頭	I 方頭細根斧箭式	16~17
		II 方頭広根斧箭式	18~19
	圭頭	III 圭頭広根斧箭式	20~25 円孔をもつものあり 平造・丸造の別あり
	IV 異形斧箭式	26~29	片丸造・平造・丸造
(E) 柳葉式		32~33	片丸造・平造
(F) 定角式	両丸造 定角式	35	
(G) 五角形式	両丸造 五角形式	36~37	

以上の形式分類にしたがって、各横穴出土の鉄鎌を示せば次頁の表のようになる。

さて、これらの鉄鎌を年代的みれば、ほぼ古墳時代後期～終末に現われるもので問題はないが、こまくみれば、13号横穴で大量に発見された片刃箭形式の鉄鎌は、この横穴群でみる限りでは鑿箭形式の鉄鎌より若干後出の形態と言うことができる。また、さまざまの形態の広根鎌を副葬した横穴が多いことは、実用的な細根鎌をまとめて副葬していない横穴に多くみられるところからして、大形で目立つくりの広根鎌のついた鎌をいく本か副葬することによって代表させたとみることができよう。

鉢

武器類にはその外、4号横穴および17号横穴の矛がある。

4号横穴の矛は袋部が欠損しているが、先端に断面菱形の刃部をもち石突を具備する通有の形態のものである。これに対し17号横穴出土のものは、全長12cmで両側から折りまげてつくった袋部をもち、鋒部は、扁平な両丸造りである。

横穴		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
形式																																	
A	I	6			19					3			18			3		25		5	29		10										
	II	6	9	9	6								10			7		2		3	24												
	III	5																															
	IV																																
	V																																
B																																	
	I																																
C	II																																
	III			1	1																												
D	I																																
	II	2		1	4		1	1	3				8					1	2	1		1	1										
	III	1	2		1		1		2									2	1														
	IV		1						2									2															
E																		10															
F		1							1																								
G																		1															

飛山横穴群出土鉄鎌形式別一覧表

(3) 馬 具

飛山横穴群から発見された馬具類としては、轡・鏡板・杏葉・雲珠・辻金具・鎧金具・尾錠・兵庫鎖・その他の帶金具などをあげることができる。

次に馬具を出土した横穴の一覧表を掲げる。

馬具 横穴	轡	鏡板	杏葉	雲珠	辻金具	鎧金具	そ の 他
1 号	○			○			金銅張懸垂金具・帶金具
3 号	○						
4 号	○2	○	○3			○	帶金具・尾錠・責金具
5 号	○						
7 号							尾錠
13 号	○					○	尾錠付兵庫鎖
17 号	○						帶金具
18 号							帶金具
19 号	○			○	○2		
20 号	○						
23 号	○				○3		
25 号				○	○3		

鎧金具とは、本体が木製の鎧で、鎧軸との連結部分に用いられた金具である。逆U字形につくられ扁平な脚部で本体に釘留される。⁽²⁾最近になって出土例が増加している資料である。また、辻金具のなかには、半球形状につくられるものと、半球形部の上半部がなくてあたかも環に脚がついたような形態のものがある。後者の例としては、23号・25号横穴出土の辻金具がそれで、上半部になにかが装飾的にはめ込まれていてそれが腐って消失したものかどうかは明らかではない。

出土した馬具のうちでとくに注目すべきものとしては、1号横穴の金銅製雲珠、4号横穴の銀張鏡板・金銅張杏葉があげられる。金銅製雲珠は残欠ではあるが乳状突起とそれをめぐる帶状突線、地文として刺突文が施されつくりのよいものであったことがうかがわれる。4号横穴出土の鏡板はS字形鏡板を模倣したような厚手大形のもので杏葉も明らかに同一工人の手による製品である。

(4) そ の 他 の 鉄 器

武器・馬具類を除いた鉄器には、斧・ひる鎌・鉈・釣針状鉄製品などがある。

斧は1号・17号・20号の各横穴から出土している。1号横穴出土の斧は約12cmの長さがあって先端に刃部がつくられ、反対側に袋部をもつ通有の状態のものである。他の2例もほとんど変りない。

17号横穴出土のひる鎌は、長さ8.5cm、巾1.8cmあって両端が折り曲げられて柄木をはさむのに便利にできている。銹着した木質部からみて、柄木はその木目が鎌本体の長辺と平行になるよう装着されていたことがわかる。⁽³⁾ひる鎌とした所以である。

鉈は29号横穴から発見された。いま刃部先端を折損しており、現存長約9cmほどある。このうち6cmが茎である。刃部は断面三角形で、鎬のある側へやや反りがみられる。

釣針状をなす鉄製品は11号横穴から出土したものである。針状の先端が折れているために断定はできない。長さ約7cm。

(5) 土 器

出土した土器類也非常に多い。須恵器が圧倒的に多いが器種別にみると、壺・高壺・聰・壇・壺・提瓶・平瓶・横甕・甕および脚付の形態がある。なかでも提瓶は1基に6個も副葬していた3号横穴の例をはじめとして、もっとも多く用いられた器種である。したがってそのあり方は葬送に際してなにか特殊な意味を示唆するようである。

特殊な形態の須恵器としては、1号横穴の脚付壺、13号横穴の脚付長頸瓶、19号横穴の脚付壺をあげることができる。また、比較的出土例の少い横甕が1号・4号横穴から完形で出土したほか、破片によって2号および14号横穴などにも存在したことがしられる。

一方、土器の出土の状態にもいくつかの形がある。まず横穴内部に大部分が置かれていたものとしては、1号・3号・4号・17号・32号の各横穴があげられる。つぎに、入口の外側にまとまって置かれていたものには、2号・14号・19号などの各横穴があつて、19号横穴はその典型的な例である。また、6号横穴や7号横穴では土器類は片づけられた状態で土師器・須恵器の残片が入口付近に散乱しているといった状態であった。土器類の置き場所あるいは出土の状態の示すものは追葬の有無なども密接にかかわってくるものであろう。例えば土器類の副葬が、玄室内部や入口部分にまとまって置かれていたものには追葬された可能性の少ない横穴が多い。1号・3号・4号・17号・19号・32号横穴などであり、これらは出土須恵器の形式も各横穴で矛盾しない。また、13号横穴では、内部の敷石の下から小形高壺・蓋破片・暗文のある土師器壺が発見され、入口部の板石敷の陰から平瓶・脚付長頸瓶が出土した。ここでは破片となつた蓋の示す年代は他の須恵器の時期よりも一時期古く位置づけられるものであり、さらに暗文のある土師器壺は歴史時代になっての再利用を物語るものであった。

(4) 横穴群から出土した須恵器の示す年代は追葬の際に置かれたとみられる須恵器をもつ一部の横穴を除けば、ほとんど接近した時期であることが知られる。横穴群出土の須恵器のうちでもっとも古式の特徴をもつものは、表採の須恵器のなかにあって壺・聰などがある。これらは須恵器Ⅱ形式に属するものである。そして飛山横穴群出土須恵器の大部分が次のⅢ期に含まれるものである。土器類は葬送祭祀用具としてあるいは副葬品として寄せ集めて用いられたものであろうから、一横穴に納められているものが必ずしも单一の時期のものでない場合もある。1号・3号・4号・19号横穴など、追葬の事実が認められないにもかかわらずやや新しい様相のものや古い特徴を残したものと/or> (5) はこののような理由によるものであろう。一括して時期が把握できるものとしては1号横穴・3号横穴・4号横穴・19号横穴・32号横穴などである。このうち3号横穴出土の須恵器はやや新しい特徴をもちⅣ期に近い時期が考えられる。また14号横穴前庭部出土の須恵器はⅢ期後半～Ⅳ期に属するもので

ある。13号横穴の小形高坏・平瓶・脚付長頸瓶なども同じくIV期の須恵器とみることができよう。さらに新しい時期を示す須恵器としては6号横穴入口部から出土した坏がある。これは蓋受けのかえりがつく形態の小形品でIV形式後半に属する。全体を通して高台のつく形式のものは一点も出土していない。したがって、出土土師器からみて歴史時代になって横穴を再利用したものを除けば、須恵器から知られる横穴利用の時期は6世紀中ごろ～7世紀初頭という年代が考えられる。

次に掲げる表は飛山横穴群出土土器の一覧表である。

須恵器 横穴	坏	高坏	聰	塙	壺	提瓶	平瓶	横甕	甕	その他	破片	土師器
1号					1	2		1		脚付塙		坏2・高坏
2号		1		1		1	1		○		横甕	
3号		2				6				小形長頸壺		
4号				1		2		1				提瓶
6号	蓋										提瓶	
7号											○	○
8号	1											
9号												
10号						1						坏
12号	○	○	○	○						台付壺・合せ壺		
13号	1						1			脚付長頸瓶	蓋	坏(暗文)
14号	2		3						○		坏・横甕	○
15号										塙蓋		
17号	1		1		1							
18号					1							
19号	4	5	2			3				脚付壺・坏蓋2		
20号						1					提瓶	
21号	蓋						1					
22号							1					
23号							1					
25号										蓋		
26号			1									
30号	蓋								○			
31号												
32号	3											把手付塊

飛山横穴群出土土器一覧表

(6) その他の遺物

その他、特筆すべき遺物としては、1号横穴出土の土製円板、2号横穴出土の扁平石製品、19号横穴から発見された紡錘車がある。

1号横穴出土の土製円板は土器片を利用して長径 5.4 cm の楕円形である。周囲は丸く仕上げられている。2号横穴の扁平石製品は、とくに形態を整えたものではないが、周縁は同じく研磨された痕跡がみとめられる。2号横穴の床面は豆粒大の玉砂利敷きであるから、敷石としての使用は一応考えられない。用途はいずれも不明である。

19号横穴の紡錘車は緑色片岩製の下端径 3.9 cm 、上端径 2.5 cm の断面台形を呈し、中央に径 0.6 cm の孔が貫通している。この側面および下面に陰刻がある。側面には×印が 2 個づつ組になって 3 ケ所陰刻されているが線が弱い。しかし下面に刻まれたものは非常に興味深いものである。孔のまわりに一重の同心円が刻まれ、中心から放射状に引かれた線とでクモの巣状を呈している。その中に混虫あるいは亀とみられるものが描かれている。体部は上面がやや丸みをもっており、短い縦線で 4 つに区切られる。前足、後足でふんばり首を前につき出したさまは亀の表現とみればよくその特徴をとらえている。尾部から出て頭部へまわっている線は、亀をつないだ紐の表現であろうか。中心から放射状に引いた線は最後に刻まれているから、あるいはこの小動物を入れるカゴのようなものの表現かもしれない。

註

- (1) 後藤守一 「上古時代鉄鎌の年代研究」 『日本古代文化研究』所収 昭和17年
- (2) 小田富士雄・真野和夫他「管ノ谷窯跡群」 八女市教育委員会 昭和46年
- 西谷 正・石山 黙他「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」Ⅲ 福岡県教育委員会 昭和47年
- 小田富士雄・真野和夫他「立山山窯跡群」 八女市教育委員会 昭和47年
- 小田富士雄・黒野肇・中村修身・真野和夫・轟雄次他「高島遺跡」北九州市教育委員会 昭和48年
- (3) 岡本明郎 「農業生産」 『日本の考古学V』 所収 昭和41年
- (4) 須恵器の編年は次によって行った。
小田富士雄・真野和夫 「立山山窯跡群」 八女市教育委員会 昭和47年
- (5) 例えば 1号横穴出土の脚付壺は大形脚の形態から須恵器Ⅲ期前半に属するとするのが適当であるが、同じく提瓶は側面の形態が扁平～平坦につくられていてやや時期の降る特徴をもっている。19号横穴出土の須恵器の場合では壺・礎はⅢ期後半に属するものであるが、高壺は脚柱のつくりも太くて、大形でありこの時期の前半の形式を伝えている。飛山横穴群全体について言えることは、提瓶に把手がつく形態が長く残っているようである。北九州地域の場合、Ⅲ期後半になって提瓶がやや小形化するとともに把手もしだいに省略されてくるのが普通である。

ま と め

飛山横穴群の築造年代は、須恵器の形式からそのほとんどが六世紀後半に比定されるものである。しかし1号、15号、19号横穴は、その形式からやや遡る年代が推定され、表採資料にⅡ—B形式に属するものが含まれていることからすれば、すでに六世紀前半ごろには築造されはじめたようである。また8号・9号横穴出土の須恵器はⅣ形式に属するものであり、六世紀終末の年代が与えられる。なお第13号横穴出土の暗文を施した大形の土師壺は奈良時代に、糸切底を呈する土師壺を出土した第10号横穴は、平安時代に再利用されたものとみることができるであろう。

飛山横穴群のある大字東上野は、古代行政区画上「豊後風土記」の佐尉郷、「和名抄」の佐井郷にあたり海部郡に属する。そして海部郡はこれらの文献から佐尉、丹生、佐加、穂門の四郷によって構成され、現在の大在、小佐井、丹生、佐賀関、保戸島の地名はその遺名と推定され、朝廷への奉仕集団として活躍していたようである。

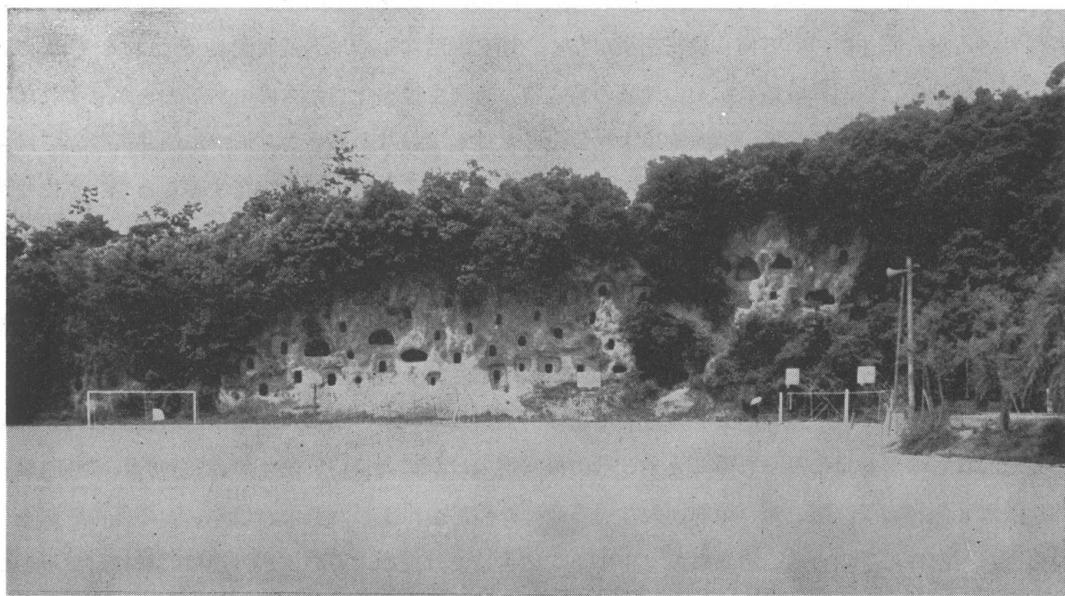
佐尉郷の地名については、「豊後風土記」佐尉郷の条に「此郷旧名酒井、今謂佐尉郷者訛也」と記されているが、酒井について何ら説明記事がなく、地名説話なしの地名説明記事とされるものである。⁽¹⁾しかし丹生、穂門郷の地名がその地域の特産物によって地名化したものであることからすれば、⁽²⁾この佐尉郷の地名もその地域の特産物によって生じた地名ではなかろうか。従って酒井については諸説が述べられているが、大和三輪山の麓に「タタラ媛」を祭る狭井神社が存在することや、小佐井地区には砂鉄の産出があったことからすれば、佐尉郷の地名は製鉄に関するものが地名化したものと解されないだろうか。

現在のところ、この佐尉郷に比定される地域での製鉄跡等の考古学的資料は何一つとしてなく、距離的にやや離れた佐伯市下城遺跡で、弥生前半に比定される製鉄跡が発見されているのみである。従って佐尉郷内にて鉄生産の事実を肯定する積極的資料はないが、本横穴群出土の鉄製品には、簡素で実用的なものが多量にみられることや、飛山横穴群のほかに刀11口、剣4口、鉄鏃90本、斧頭15口、棒状鉄器6個、刀子、鎌、鉈、金鍊、釦など多数の鉄製品を出土した築山古墳や、刀の他に鉄剣9口⁽⁴⁾を出土した臼杵市下山古墳、さらに坂ノ市町上ノ坊古墳では環頭大刀のほかに22口の鉄剣が出土しており、県下における古墳の実態が不明確であるものの、この海部地域の古墳に多数の鉄製品が出土している事実は、この地方における鉄生産の問題のみでなく、古代海部族の性格を知る上にも考慮すべきものであろう。

佐尉郷、佐加郷のある佐賀関半島北側海岸部は、弥生時代に青銅製利器が集中し、古墳時代には四世紀に比定される猫塚古墳が出現し、以後は馬場古墳、築山古墳、亀塚古墳としだいに大形前方後円墳が築造されて、四世紀末から五世紀代にかけて、瀬戸内交通の重要な地域として繁栄するのである。ところが五世紀中葉以後は、この地域の勢力は急激に衰退し、豊後国の勢力はしだいに大分平野を中心として統一の機運が高まっていくのである。すなわちこの時期には、石室墳が流行していくのであるが、⁽⁶⁾海部地方では六世紀後半に比定され、石室に何ら特徴を有しない中ノ原古墳をみるとすぎなく、多くは上野、庄ノ原台地周辺に集中するのである。しかしこのような時期においても、飛山横

穴群のごとき多量の鉄製品が出土し、中央からの供給によるものと目される金銅製雲珠を出土した第1号横穴、金銅張杏葉、銀張鏡板を出土した第4号横穴などの被葬者は、明らかにこの地域の有力者として位置づけることができる。特に第1号横穴の被葬者は、横穴の構造、副葬品からしても、中ノ原古墳の被葬者をしのぐ勢力を有していたものと推定されよう。さらには、この佐尉郷にて古代鉄製産の実態が明確にされればそれらの技術集団との関係について興味ある問題へと発展しよう。

一方、古墳時代後期になると大分市とその周辺地域では、石室古墳と横穴古墳との割合は前述のように横穴古墳が圧倒的に多数を占めるようになる。大分市滝尾にある通称「滝尾百穴」はその代表的なもので確認されただけでも70基をこえる。そのほか、大分市松岡の一の谷横穴群、大野川以東では同宮川内の阿蘇入横穴群、中戸次の北平横穴群などがあげられる。しかしこれらの横穴はほとんどのものが、早くから開口してすでに内容がわからなくなってしまっている。したがって横穴古墳は一般に軽視されがちであるが、今回調査された飛山横穴群のごとき豊富な内容をもったものがあることはその立地する歴史的環境とあわせて考えるとき見過すことのできない問題を含むものである。



第39図 大分市滝尾「滝尾百穴」

註

- (1) 秋本吉郎 「風土記の研究」 昭和38年
- (2) 佐藤四信 「豊後風土記の研究」 昭和31年
- (3) 佐伯市教育委員会 「白潟遺跡」
- (4) 大分県教育委員会 「中ノ原、馬場古墳緊急発掘調査」 (『大分県文化財調査報告第十五輯』) 昭和43年
- (5) 賀川光夫 「大分県の考古学」 昭和46年
- (6) 坂ノ市地区教育研究会郷土研究部編「坂ノ市を中心とした原始時代の文化」
坂ノ市町市尾上ノ坊古墳 1958年
- (7) 現存する著名なものとしては、宮苑千代丸古墳、賀来丑殿古墳があり、その他には賀来の田崎6号墳、万寿山1号墳などは石室墳と推定される。